

可若又王子ノ降誕セサル時ハ仮定ノ繼續者ハ此間其
 王位繼續ノ權ヲ不正ニ奪ハレタル者ト謂ハサル可カラズ
 然レ而シテ今以上ノ正確ナル原理ニ准據シテ攝政者ヲ立
 テントモ即チ王ノ姪女ウイクトリア^{ウイクトリア}未下年ノ間マ王ノ
 殂落スルコアルハ直ニウイクトリア^{ウイクトリア}ヲ立テ女王トスベ
 キ下雖爾後日若シ王后ニ於テ王子ヲ舉ケルコアルニ於テ
 ハウイクトリア^{ウイクトリア}ハ其王位ヲ右王子ニ讓テ可カラサルコ
 ト豫定^{ウイクトリア}又^{ウイクトリア}ト公ノ寡夫人ハ直ニ幼稚ナル女王ノ爲メ
 其各義ヲ以テ攝政者タルノ職ヲ執ルベシト雖モ若シ選
 腹^{ウイクトリア}王子ノ降誕スルコアルハ王后ヲ以テ王子ノ爲
 メニ攝政者トナルコトニ定メテ而シテ此等ノ原理ハ各政
 黨ノ政治家及法律家ノ舉テ可トモ所^{ウイクトリア}テ以上ノ攝

ウイクトリア
 女王ノ世ノ最
 初ノ攝政條例

政條例案ハ初メウイクトリア^{ウイクトリア}公ノ内閣ヲ起草ニ係ルト雖モ
 シレ^{ウイクトリア}公ノ内閣ニ於テモ亦之ヲ採リテ以テ其可決^{ウイクトリア}所
 事^{ウイクトリア}レリ是レ實ニ將來ノ事變ニ處スルノ最モ宜キヲ得テ
 ナリ方法ニシテ而シテ其事變ノ竟ニ起ラザリシハ甚ク幸
 ナリ^{ウイクトリア}謂フ可シウイクトリア^{ウイクトリア}四世ハ短促ニシテ而カモ多事ヲ
 ル一期間ヲ統治スルノ後一千八百三十七年ニ至リ終ニ殂
 落^{ウイクトリア}此時女王陛下ハ纔ニ一ヶ月ヲ俟タシテ滿十八歳
 ニ達シ得ルノ齡ニシテ祥瑞吉兆ニ圍^{ウイクトリア}レテ王位ニ登リ而
 シテ此等ノ瑞兆ハ爾後果シテ悉ク實驗セラレタリ^{ウイクトリア}
 女王陛下ノ王位ニ即クヤハノ^{ウイクトリア}ノ王ヲ以テ仮定シ王
 位繼續者トナセリ而シテ王ハ恐ラシク外國ニ住ス可キガ
 故ニ若シ女王陛下ノ殂スルコアルニ際シテ王ノ尙ホ外國

一千八百四十年第二ノ攝政條例

ニ在ル間ハ代テ政治ヲ行フノ代理者ナカル可カラズ因テ
 王ノ英國ニ來ルマテハ國王代理裁判官(按)ナヤンセリ一廳
 ナ以テ國王代理トシ其不在中政務ヲ至於女王ノ名義ヲ
 假攝セシム之ヲ國王代理裁判官ト云フ
 以テ政ヲ攝行スルハ定メタリ然レテ女王ハ一千八百四
 十年ニ至リ婚禮ヲ行ヒ茲以テ更ニ他ノ事變ニ關シテ豫
 備ヲ爲サシム可カラサルニ至レテ此事變ハ前段ノ事
 變ニ比シテ或ハ起ルアラストシテ患更ニ多カリシ雖
 竟ニ其事ソ起ルナカリシ亦幸ナリト云フ可シ此豫想ソ
 事變ニ關シテ議院ハ一千八百三十一年ノ先例ニ從テ若
 女王ノ子ニシテ其十八歳ニ達スル前ニ王位ニ即クコ
 ニ於テハ王夫アルニシテ(按)即チ少クハ以テ其攝政者
 立シテトナシ又攝政參議會ヲ置クコト決シ且國王ノ特權

ヲ施行スルコトニ關シテ攝政者ノ權ニ制限ヲ設ケサルコト
 定メタリ然レテ王位繼續ノ順序ヲ變スルノ議案ト英國ノ
 教會ニ於テ畫一ノ禮拜式ヲ行フコトニ關スルノ議案ト蘇格
 蘭ノ教會ノ權利ニ關スルノ議案トノミハ攝政者ニ於テ之
 ナ認可スルノ權ナキ者トセリ而シテ此等ノ注意ニ根據シ
 テ立案セシ所ノ議案ハ各政黨ノ是認ヲ得テ之ヲ可決スル
 ニ至レリ

ヘンリー七世
及ヒヘンリー

英王ノ如ク檀權有以ルソ君主ヲ見ルナキニ至リ
可シト雖兵士黨派ヨリ奪掠セシ所實者他ノ黨派ノ貪取
於此所ニハ倒國王ノ戰場ニ於テ奪掠セシ若クハ刑臺
爲テ殺シテ其血ヲ飲ムル所有主ヨリ没収シ得ル所
百計少所リ外國附屬寺院按外國附屬寺院ハ國王ノ受テ内國ニ設立スル
院ノ小寺ノ土地没収セシ以テ大ニ王家ノ財源増加
致ヌヨリ雖ヒモ其世位時ニ至テハ王ノ歲入ハ一年
五千磅ノ小額ニ減シテリ而シテ王ノ世位於テ其必要品
給セズカ爲テ大民ヲ拜領地ヲ取テ止シ御自ヲ織院共
之認許恩返シ數回ニ及ヌヨリ恐レテ合セテ至リテ
英王ノ一七世ニ姓極ク裕糧食ニシテ王家ノ歲入ヲ舊法復

八世ノ時ニ於
テ土地ノ歲入
ノ増加セシ

取テ節約政策因前代ノ浪費ヲ回償スル法得テリ
其得テ所ノ如キ迄ニ至リテ八世ノ諸寺院ト其他宗教
上及ビ慈善上ニ關スル建築物ト奪テ其價格三千萬磅以
上ニ至リシニ比スルハ文言ヲ足テ至リテ其然ト後
前ノ如ク貧窮送リシ雖ヒ國王ヨリ寺院ノ土地ノ願與夫
得シ所ノ大貴族ノ輩ニ至テハ其君主ノ如クニ淺慮ナラス
之其得テ所ノ土地ヲ固ク握リテ之ヲ子孫ニ傳ヘテリ
スニ世即位第十七年ノ頃ニ於テ王家ノ屬スル土地ト云
ハズテ一ノ公領トヨリ生テ歲入ノ總額ハ一年六万六千

數入ノ總額
ニ於テ土地
ノ増加セシ

共和政治ノ時
ニ於テ土地ノ
歳入ノ減絶セ
シ

王家ノ歳入ノ
回復及ヒ爾後
之ヲ浪費セシ

八百七十磅を超ヘサリシト雖も王ノ負債ハ一百万磅以上
ノ多量ニ登リテ云フ而シテ王ノ治世間ニ於テ王ハ七十
七万五千磅ノ土地ヲ賣却シ又之ヲ殆同額ノ負債ヲ遺シ
然レモ土地ノ歳入ハ更ニ一層ノ凶日ヲ逢遭セザル可クテ
サレ者ヲ更キ蓋シテトレス一世ハ議院ヨリ租税ヲ供給シ
得ルヲ能ハス又不正ニ苛取ノ手段ヲ施シテ其雖も多額
得ル所ナカリシヲ以テ止メテ得ズ王家ノ財産ヲ賣却シ又
之ヲ典却スルニ至レリ王殂スルノ後議院ハ王ヲ開始シ以
所著例ヲ倣ヒテ奪掠ノ處置ヲ行ヒ議院ニテ寡リテ兵士
ヲ給金ニ殘高ヲ拂ヒ又新政府ノ負債ヲ償却セシカ爲メニ
殆ノト王家財産ノ全部ヲ賣拂ヒテリ復位ノ時ニ及ビ右議

王家ノ歳入ノ
回復及ヒ爾後
之ヲ浪費セシ

院ニ於テ行ヒタル賣拂ハ其無効ナル旨ヲ布告シ王家ノ財
産ヲ天部ハ之ヲ復スルヲ得タ(按本文新政府ハ一千六
百四十九年ノ革命ニ於テ
ナヤシレテ殺害セラレタル後クロムウェルカ組織セ
シ所共和政府ヲ云フ而シテ復位トアルハ一千六百六十
六年共和政府ノ位ニ復セシメテ云フ然レモ之ヲ復シ
二世ノ英國ノ王位ニ復セシメタルニ故ニチヤトレス二世
唯再ヒ之ヲ浪費セシカ爲メナルニ故ニチヤトレス二世
即位ス第三年ニ至リ王家ノ歳入ハ一年二十三万七千九百
磅ヨリ十萬磅ニ減シタリ王ハ其即位ノ第一年ニ於テ若
大内地物産稅ヲ立ツルノ代償トシテ後見事務局(按在時英
國王ノ借地ノ利未丁年ナリ國王ノ後見事務局
ヨリ此後見ノ事務ト借地人ニ課スルノ軍役ト廢止セリ
ト取扱フノ局ナリ)是レ國王ガ其世襲ノ歳入ヲ捐棄シタルノ嚆矢ナリトス
又王ノ治世間ニ於テ議院ノ條例ヲ以テ王家ニ屬スル所ノ

將議院ハ於テ國王ノ歲入ヲ緊要ナルヲ

王ノ無謀ナリシカ爲メ臣民ノ給與ニ依頼セザル可カラサル必要ニ迫ラレテ後國王ノ入用ト政府ノ失費ノ益ヲ増加スルニ從ヒ終ニ國王ハ全ク議院ノ管制ニ服セザル可カラサルニ至レリ
人民ニ於テ政府ノ行政部ヲ管制スルヲ得ンガ爲メ制ハ下院ニ於テ租税ノ供給ヲ議定スルニ至リシトテ緊要ナル憲法上ノ變革ハアラサルナリ又國王權力ノ過度ノ擴張ヲ制センカ爲メハ議院ニ於テ國王ノ歲入ヲ定ムルヲ得ルホト有効ナル策ハアラサルナリテ二世ノ時ニ至リ議院ノ命令以テ租税ノ費途ヲ指定スルノ主義始テ確定セラル
又此事ハ議院カ政府公費ノ爲メニ租税ヲ供給スルニ於テ履行セザル可カラサル所ノ一條件トナレリ以前ト雖此

革命以前ノ國王ノ歲入

主義ヲ認メシトナキニ非スト雖モ公然之ヲ確定シタルハ實ニ此時コアリト大然レテ革命前ニ於テハ(按一千六百八十八年ノ革命前)國王一身ノ費用ニ關シテハニモ制限ヲ立ツル所ナラズキ蓋シ從前ハ累代國王即位ノ初年ニ議院ニ於テ國王ノ通常ノ歲入ヲ定ムルノ例ニシテ此等ノ通常歲入ハ平和ノ時ニ在テハ國王ノ威嚴及ヒ政府ヲ維持スルノト國家ヲ防禦スルノトノ費用ニ充テシカ爲メニ之ヲ供給シタル者ナリ而シテ此外ニ非常ノ事アルニ會セバ臨時ニ特別ノ金額ヲ供給スルコトナリキ此等ノ通常歲入ハ第一ニハ國王所屬ノ世襲ノ諸歲入ヨリ成リ又第二ニハ國王一世ノ間國王ノ爲メニ議定セシ所ノ租税ノ收入ヨリ成ル者トス而シテ國王世襲ノ歲入ハ國王直領ノ土地ノ借地料封建的ノ諸權

利驛遞局ノ収入、酒商免許料等ヨリ成ル者ニ達スル者ニ千六百六十年チ、（按）封建的ノ借地法ヲ廢止シタル後ハ、更ニ内地物産稅ノ一部分ヲ加シ、（按）封建的ノ諸權利ヲシテ、（按）諸種ノ權利ヲ有シ、（按）重部並ニハ、（按）國王ヲシテ、（按）三世ノ時、於テ國王世襲者歲入、國王ノ世襲者間、（按）玉ノ爲メニ、議定シタル租稅トハ、（按）平均歲入、年百五萬零々九百六十四磅、（按）而シテ、（按）此歲入ノ總高ヨリ、政府必要ノ諸費ヲ扣除シ、尙殘額、（按）此殘額、平國玉カ自家ノ威嚴ト權勢トヲ維持セ、（按）爲メテ、（按）其快樂トシ、（按）浪費ヲナシ、（按）恣ニ、（按）隨意ニ、（按）消費スル、（按）得テ、（按）此等ノ泉源、（按）以テ、（按）尙ホ、（按）足ル、（按）然レ、（按）議院ニ於テ、

王ノ敵人
革命以前ノ國

ハ、王室ノ利益
ウヰリアム及
ヒマリノ王
室年俸金

特別ニ戰費ニ指定セシ所ノ巨大ノ金額、（按）自家ノ私用ニ供セシ、（按）疑フ可カラサルナリ、（按）故ニ將來ニ於テ、（按）此ノ如キ濫用ヲ防ガシ、（按）爲メテ、（按）及ヒ、（按）マ、（按）即位スルニ及ヒ、（按）議院ハ、（按）別ニ、（按）王室年俸金ヲ制シ、（按）立テ、（按）マ、（按）而シテ、（按）此王室年俸金中、（按）國王宮内ノ諸費及ヒ、（按）國王一身ノ諸費ト、（按）文官ノ給料及ヒ、（按）年金等ヲ、（按）任拂フ可キ者トセリ、（按）即チ、（按）平和ノ時ニ於テ、（按）國王ノ爲メニ、（按）供給スル所ノ歲入ヲ、（按）百三十萬磅ト、（按）議定シ、（按）此内約、（按）七十萬磅ヲ、（按）以テ、（按）王室費トシ、（按）シテ、（按）此王室費ハ、（按）一年四十萬磅餘ヲ、（按）出ス、（按）所ノ國王世襲ノ歲入ト、（按）約、（按）三十萬磅ヲ、（按）出ス、（按）所ノ内地物産稅ノ一部分トヨリ、（按）成ル者ナリ、（按）斯ク、（按）此時始テ、（按）施セシ、（按）所ノ制ハ、（按）後代ニ於テ、（按）モ、（按）續テ、（按）之ヲ、（按）行ヒ、（按）現今ト、（按）雖モ、（按）王室年俸金ハ、

單ニ國王ノ費用ノミニアラスンテ政府ノ文治ニ屬スル費用ノ一分ヲモ此中ニ含ムナリ

女王アンノ王室年俸金

女王アンノ王室年俸金モ議院ニ於テウヰリアム三世ノ王室年俸金ト同様ノ方法ヲ以テ之ヲ定メ其金額モ之ト同様ニ算定セリ而シテ女王ハ自家ノ爲メニ議定セラレタル歳入ノ或ハ前王ノ得シ所ノ歳入ノ高ニ及ハサルアラシク恐レタリト雖モ尙ホ一ケ年十萬磅ヲ出シテ之ヲ公費ニ充テシテ約シタリ然ルニ女王ハ此約ヲ履行セザリシノミナラズ其在位十二年ノ間ニ百二十萬磅ノ負債ヲ起シタリ而シテ議院ハ公債ヲ募集シテ右ノ負債ヲ仕拂ヒ又此公債ハ王室年俸金中ヨリ之ヲ償還ス可キトナセリ

ジョージ一世ノ王室年俸金

ジョージ一世ノ王室年俸金ハ一年七十萬磅ニ算定セリ而

ジョージ二世ノ王室年俸金

シテ此治世間ニ百萬磅ノ負債ヲ起セシテ以テ議院ニ以上同ノ方法ニ從テ此負債ヲ仕拂ヒタリ然レドモ議院ニ國王世襲ノ歳入ハジョージ二世在位時ニ至ルマデハ尙ホ猶存スル若シ此等ノ歳入ノ一年八十萬磅以下ニ減スルヨリハ庶幾議院ニ於テ其不足ヲ補フニ法ニシテ此金額ハ超過スル所ノ殘額アレハ其額ノ多寡ヲ問ハズ國王ハ悉ク之ヲ収メ然レドモ權アリシナリ此法ニ據レハ王室ノ歳入ノ最低額ニ一定セル者ニシテ其以下ニ減スルコトヲ許サズ故ニ稍々定額王室年俸金ノ制ニ近キ者ト云フ可シ而シテジョージ三世ノ在位中ニ最後ニ五年間ニ於テハ此等ノ世襲歳入ハ平均一ケ年八十二萬九千五百五十五磅ニ登リタリト雖モ全治世間ニ平均スルニハ一ケ年八十萬磅ニ達セサルナ

リ二千七百四十六年ニ於テ王室年俸金申付リ往拂ハサル
 可カラザル所ニ四十五万六千磅ニ負債アリ此負債ハ議
 院ニ於テ之ヲ償却セザル蓋シ王ノ言按所ニ據テハ世襲歳収
 入ニ於テ年派十万磅以下ニ減シタルガ爲メ此等ノ負債ヲ
 起セザ者ナシハ議院ハ最初ノ契約ニ從ヒ其不足ヲ補ハシ
 得サ得サ得サナリトシテ其後ハ王室ノ爲メ人ノ引取
 シヨ取テ三世ノ王位其即ク及ヒ王ハ議院王ヲ其適當
 ト思惟テ所管從テ英蘭内國國王世襲ノ歳収全自由ニ處
 分スル得得得得ルモ一致セテ又從來國王ハ議院ニ於
 テ主分テリ運算定スル所ニ從ヒ若干ノ歳入ヲ得テ亦
 今ヤ王室宮内ノ諸費ハ國王ハ尊榮ト威嚴トヲ維持セシ
 ガ爲メ王室年俸金ヲ定額減シテ受取ルル事諾志ナ

シヨ一ノ三世ノ王室年俸金

ノ王室年俸金

而シテ議院ガ直接ニ國王一身ノ費用ヲ管制スルノ權者有
 スルハ此時始テ公認セラルル者ナリ王ガ自家ノ特
 權ヲ擴張シ國家ニ他ノ諸權力ヲ控制シ免レシメテ
 然レ際ニ在テ却テ國王ハ議院ニ關係シ此ノ關係緊要ナ
 然變革ノ起リタルニ甚ク奇ナリト云ハサル可カラズ然
 然幾時ハテスルテ王ガ負債ヲ起シタルヲ見レハ王ハ以上
 ノ讓與ノ爲メニ決シテ國王ノ權勢ヲ減セシメテ入意非
 ナリシ事ヲ知ル可キナリ
 議院ノ種々ノ條例ニ據リ前代諸王ノ手ニ歸セシ所又世襲
 ノ歳入ハ今ヤ悉ク之ヲ「アッダレト」ト「フオン」ト稱スル科
 目ニ公債償却資金ノ中ニ算入シ而シテ當時ウエールス妃カ
 ムヘルランド公王女アメリイ等ニ與ヘシ所ノ年金ハ廢止

ノ王室年俸金

王室年俸金中
ヨリ仕拂ハサ
ル可カラサル
費用

捕奪者ノ費用ニ供シ捕奪ノ業ニ從事セル人々ニ仕拂ハサ
〔按〕捕奪者トハ敵國ノ人又ハ敵國ノ物品ヲ故ヨリ此等ノ金額
海上ニ奪フト等ノ事ニ從事セル者ヲ云フ故ヨリ此等ノ金額
ヲ扣除スルハ現行王ノ収入池ノ金額ハ則チ四百七十三
万二千六百五十七磅ナリ而シテ前代ノ王ニ在リテ四萬八千
以後ノ諸王中最モ節儉ヲ行ヒタル人王ニ在リテ其王室年俸
金中ヨリ十七万三千六百〇五磅ヲ貯積セルカ是レ亦之見
リ哉三世ノ得ル所トナレバ其後ノ世ニ在リテ其後ノ世ニ在リ
此等ノ歳入ハ巨額ナリシニ雖モ之ヲ以テ仕拂ハサル可カラ
漸ク所ノ負擔ハ更ニ巨額トシテ其官位及ヒ年金ハ亦次第増
加シテ王室ノ歳入ヲ以テ之ヲ仕拂ハサシテ是レ亦之見
リ哉三世ノ位即チ及ヒ王ノ前王ノ宮内官吏ノ太
半ノ之ヲ保續シ同時ニ自家ノ數多ク從臣ヲ宮内ニ加ヘテ

内ニ置被ル
捕奪者ノ
王室年俸金中

然レモ此ノ如ク王室年俸金中ヨリ仕拂ハサル可カラサ
ル費用增加スルニ際シ王及ビ王族ハ唯ニ節約ヲ行ヒ
シテ其ノ歳入實ニ國王ノ相當ニシテ其非常ニ怪客ヲ行
ヒテ一千七百六十五年王室ノ歳入ノ家屋ヲ買上テ
之ヲ王后ノ宮殿ト定メテ其後ノ世ニ傳ルル氏ノ評
シテ之ヲ王后ノ宮殿トシテ其後ノ世ニ傳ルル氏ノ評
云フ可カラサルハ故チ其後ノ世ニ傳ルル氏ノ評
居テ唯奴婢ヲ置テ以テ之ヲ宮廷タルノ華美ニ毫モ裝
飾セザルハ其氏自ク此等ノ事ニ於テ人民ニ唯怪客ノ所爲
ヲ見ルルニシテ却テ奢侈トシテ生ス可キ諸結菓ノ之ニ伴
隨セルアルアリ一物ヲ消費セラレバ又一物ヲ貯蓄セ
ラルハナシ人民ハ一物ノ貯蓄セラレタルヲモ信スル能

王室年俸金ヲ
散シ以テ議院
内ニ權勢ヲ得
シ

又一物ノ消費セラレタルヲモ見ル能ハサルナリトハ極
メテ慳吝ナリト雖モ尙ホ財ヲ蓄積スルニアラヌシテ甚ク
窮セリ是レ全ク王カ其財ヲ自家ノ党友ニ頒テ其心ヲ得
シトスルニ由ルナリト云フホルク氏ノ
此語ハ蓋シ暗ニ之ヲ云ヘルナリ
此ノ如ク外觀ニ於テ非常ノ慳吝ヲ行フニ際シテ王ハ國王
ノ威勢ヲ張リ其權力ヲ確立セシメ爲メニ本書第一編ニ論
ゼシ所ノ夫ノ劇烈ナル抗爭ニ從事セリ故ニ議院ニ於テ王
ノ党友カ忠誠ニシテ且從順ナリシ者ハ全ク王カ其年俸金
ヲ散シテ之ヲ然ラシメタル者ナリトノ推察ヲ下セザル
ヲ得サルナリ即チ王ハ其從臣ノ爲ニ財ヲ奪ハレテトス
ルカ若シ然ラサレハ王ハ官位年俸金及ヒ其他金錢上ノ誘惑
手段ニ因リテ議院内ニ贊助ヲ購置シ然ル者ナリト云フ
外ナキト云フ

一千七百六十
九年王室ノ債
債ノ高

一千七百六十九年二月ニ於テ未ダ王ノ即位後九ケ年ニ至
ラサリシト雖モ王室年俸金中ヨリ仕拂ハサル可カラサル
負債ノ高ハ五十一万三千五百十一磅ニ達シタリ而シテ王
ハ止ムヲ得ズシテ此負債ヲ償却センコトヲ議院ニ要求セサ
ル可カラサルニ至レリ當時人民ハウルクスノ刑ニ處セラ
レタルヲ怒リ朝廷ノ政畧ヲ惡シ王ノ最モ不人望ナル時ナ
リケレハ王カ此要求ヲ爲サンコトハ決シテ時宜ヲ得タリト
云フ可カラサルナリ然ルニ國民ハ此ノ如ク不平ヲ懷キシ
ト雖モ議院ハ王能ク之ヲ籠絡スルヲ得タリ蓋シ議院ニ於
テハ負債ノ原因ヲ調査シ其説明ヲ得ンコトヲ求メタリト雖
モ此ノ如キ調査ヲ行フコトニ關シテハ悉ク宰相ノ爲ニ拒マ
レ遂ニ説明ヲ得ルコトナクシテ以上ノ金額ヲ供給スルニ至

ソリ翌年王室年俸金ノ支出方ヲ檢査セシトシ議ヲ再起
 タリト雖モ前年ノ如ク行ハレ、ヲ得得リキ而シテ、
 公ノ如キハ國會議員ニ賄賂ヲ行ハシカ爲メ宗王室ノ歳入
 ナ消費セシ者ニシテ、信ヲ公言セリ又ホ、
 其著セシ所ノ現時ノ不平ノ原因ト題セ、
 於テ一大主意ヲ論セシ所ハ王室歳入支出ノ事ト累
 代ノ慣習ニ從テ王室歳入支出ノ理由ヲ議院ニ説明セ、
 シトトヲ痛論スルニ、
 期々過度ノ費用ヲ起シタル原因ハ何レニ、
 セヨ尙ホ其原因ハ依然トシテ行ハレテ、
 アラサリキ而シテ爾後八年ヲ經過スルノ後ニ至リ王ハ再
 ヒ六十二万八千三百四十磅ノ負債ヲ償却セシ、
 議院ニ

一千七百七十
 七年王室ノ負
 債

此王室年俸
 一千七百七十

要求シタルノミナズ、
 増加セシモノヲモ要求セリ、
 明スル所ノ報告書ヲ議院ニ示シ、
 以テ足レリトスル所ニ、
 憚ル所ナク費用増加ノ原因ヲ論難シ、
 歳入ト比較シ秘密ニ服務ニ費ヤシタル金額ヲ巨大ナル
 コト及ビ年金ノ大ニ増加セシコトヲ説キ、
 手段ハ行ハレ、
 要求ヲ諾スルニ至レリ、
 氏カ王人認可ヲ請ハンカ爲メ、
 時氏ハ王ニ奏言ス曰ク、
 下院ハ今巨大ノ金額ヲ陛下ニ供給

一千七百七十
九年王室年俸

カ
ルノミナラス此外ニ毎年ノ歳入ヲ非常ニ増加スル者ニ
シテ其歳入ノ巨額ナルハ實ニ前例ヲ見サル所ニシテ陛下
ノ最多ノ費用ト雖モ之ヲ尽ス可キ能ハサル可シト而シテ議
長此不敬ノ奏言ハ下院ノ注目大ニ所トナリテ之ヲ非難
セシ者アリシト雖モ議長ノ朋友タルフオックス氏ハ議長ヲ
援クシテ以テ終ニ議長ハ巨大ノ負債ヲ政府ニ擔フノ時ニ
際シテ下院カ王室ノ尊榮ト威嚴トヲ維持スルニ熱心ナリ
トテ正當ノ氣力ヲ以テ表示セル者ナリトテ爲メニ下院ノ
禮謝ヲ受タリ然レモノルトシ氏ノ此言ハ決シテ朝廷ノ宥
恕スル所トナラスシテ翌年ノ議院ニ於テ氏ハ議長ノ席ヲ
失ハサルヲ得サルニ至レリ
王ノ要求セシ所ハ斯ク速ニ之ヲ諾シタリト雖モ之カ爲メ

金ニ關スル討
論

一千七百八十
年ホルク氏ノ
財政改革案

ニ不滿ノ情ヲ挑起シ而シテ此不滿ノ情ハ久シク消滅セサ
ルキ蓋シ政府ノ歳費ト國家ノ負債トハ亞米利加戰爭ノ爲
メニ非常ニ増加シ而シテ此時再ヒ王室年俸金ノ濫費ハ議
院ノ注目スル所トナレリ一千七百七十九年リナモント公
ハ王室年俸金ノ減額ヲ王ニ要請セシトノ議ヲ起シタリト
雖モ此議ハ一ニ對スルニ以上ノ多數ヲ以テ廢棄セラレタ
リ然レモ數日後ニ至リホルク氏ハ財政改革ノ議案ヲ提出
セシトノ通知ヲ爲セリ蓋シ氏ノ名ハ此議案ニ付着シテ榮
ヲ後世ニ遺セリ一千七百八十年二月廿一日氏ハ其精駁ハ
ル考案ヲ陳示シタリシニ此間ニ在テ人民ヨリ議院ニ歎願
ヲ爲ス者多ク之アリテ爲メニ益々氏ノ論ニ力ヲ副ヘタリ
氏ノ策ハ數多ノ官職ヲ廢止シ歳費ヲ節約シ政府諸部局ノ

世進進革命
本報五月
一千七百八十
金二四二五

事務下勘定法ト改頁スルコト含ミ又氏ハ巧ニ諸事ヲ查
察シ就中王室年俸金費出ノ事ニ關シテ最モ精密ニ之ヲ
穿鑿セリ氏ハ王宮ノ事ヲ論テ社會ノ事情ノ變遷ヲ以テ
夫説キ宮内官職ノ多ク尙ホ陳腐ノ性質ヲ保テ此ヲ示
シタリ氏ハ言ニ曰ク王宮ハ古昔ノ風俗中ニ於テ威嚴ト尊
崇ヲ生ズルニ足ラシキ者ハ悉ク之ヲ失ヒ却テ煩累ヲ出
負擔野蠻ナル出費トシテ之ヲ廢スルニ下而シテ氏
ハ浪費ヲ濫用トシ實證ヲ示シ無用ノ官職アルコト本官之ヲ
行ハズシテ代理官之ヲ行フ所ノ官職ナルヲ王ノ卑僕カ國
會議員ヲナシ居ルニ各部局皆於テ營利浪費官金私倫ノ事
行ハズテ毫毛之ヲ制セザルコト等々論テ其氏ハ官職
ヲ減削及ビ之ヲ合併セシメテ主張シ又年金ノ總額減シ

一千七百八十
一年ホルン氏
ノ歳費條例案

年六万磅ヲ減シテ且此等ノ年金ニ一切出納局ヨリ拂
出サズシテナリ論テ其費ハ各機關ニ歸スルコトヲ
ホシ氏ハ以上ノ諸目的ヲ實行セシカ爲メニ五号ノ議案
ヲ提出スルノ許可ヲ得タリ雖モ當期ノ國會ニ於テ討議
セシ所ハ唯歳費條例案ノ一ニシテ其ノ外ニ此議案ヲ第三讀會
ヲ開キ且委員ニ付シテ其諸箇條ヲ討議セシメタリト雖モ
結局政府黨ノ爲メニ廢棄セラレタリ然レモ此等ノ討論
爲メニソルズ公認シテ政府財政調査員ヲ設クシテ
説ク爲サシムルニ至レリ
整年ニ至リホルン氏ハ再ヒ此事ニ力ヲ尽シ其歳費條例案
ヲ提出スルノ許可ヲ得タリ其議案ヲ主張スルニ於テ
彼ノウチアム、ピツ、氏ハ勇膽ナル賛成ヲ得タリ蓋シテ

一千七百八十
二年ロッキン
ガム公ノ内閣
ノ政略

ト氏ハ此時始テ議院ニ於テ屬目セラル、所トナリタリ然
レ此議案ハ第二議會ニ於テ廢棄セラレタリキ
然レ此疑問成敗ノ景況俄ニ一變セリ蓋シロッキンガム公
ノ内閣ハ財政改革ノ主義ヲ執ル者ニシテ今ヤ此事ヲ實行
セントクノ決心ヲ以テ官ニ就ケリ公ハ自家ノ考案ヲ王ニ奏
示候且説明シテ曰ク今節減セント欲スル所ノ歳費ノ諸科
目ハ一モ陛下ノ一身若クハ王族ニ關スル所ノ費用ニ及
ナシヨシ然ラズトスルモ朝廷ノ威嚴ヲ助ケル如キ費用ハ
ハ毫毛及フナシト且曰ク此歳費ノ節約ハ實ニ諸相ノ特典
ト權勢トヲ削ラント欲スルカ爲メナルノミト一千七百八
十二年四月十五日王ハ公費ノ各科目ニ節約ヲ行ハントテ
德恩ニ且政府ノ文治ニ屬スル歳出ヲ改革シ之カ制規ヲ立

一千七百八十
二年ロッキン
ガム公ノ内閣
ノ政略

ツルヲ議ハ王ニ於テ既ニ之ヲ熟考シ然レ旨ヲ述フ所
一書ヲ上下兩院ニ送レリ左ノハ政府ノ政略ト王ノ人民
對スル有様トニ於テ此ヲ如キ好變化ヲ呈シタルヲ見テ
ルク氏カ下院及ヒ邦國ニ向テ之ヲ祝セシ亦宜ク云
テ可シ兩院ニ於テハ王ノ此通知ヲ受ケテ誠實ニ之ヲ承認
セリ之ニ次キ王ハ直ニ他ノ通知ヲ議院ニ與ヘタリ此通知
ハ前回ノ通知ニ如ク満足ス可キ者ニラスト雖モ尙ホ前
回王カ德恩ニシ所ノ財政節約ヲ行スノ必要ナルヲ証ス
ル者ニ云フ可シト云ハズト王ニ對シテ
蓋シ王ハ今ヤ再ヒ王室年俸金中ヨリ仕拂ハサル可カニサ
ル所ノ負債アルヲ議院ニ通知セサルヲ得サルニ至リ
然レモ從前ノ如ク政府ノ歳入中ヨリ此負債ヲ仕拂ハ

一千七百八十
二年王室ノ負
債

國王世襲歲入ノ剩餘高

王室年俸金中ヨリ仕拂フ可キ金額ヲ輕減スルコト

斯ク費用ノ常ニ超過セシトナシ辭解セシカ爲メニ王カ曩キニ捐棄シタル國王世襲歲入ノ剩餘高ハ以テ此等ノ費用超過補償ヲニ餘リテハ其ノ説キ者ニ蓋テ千八百十五年於テ國王世襲歲入ノ剩餘高初王ノ即位以來初王室費用ノ全額ニ超過スルニ至リ出テ然ル但シ茲ニ所謂王室費用ハ全額トシ議院ニ於テ仕拂ヒタル負債ノ高及以後年ニ至リ王室年俸金中ヨリ仕拂フ要セザルコト大ニ然ル諸金額ヲモ合算セザル者ニ知ル可シ然レバ當時在リテハ國王ハ一身ノ快樂及ヒ威嚴ニ毫モ關係セザル費用ト雖モ尙ホ常ニ之ヲ王室年俸金中ヨリ仕拂ヒテ例ニハ裁判官ノ給料、公使及ヒ其他政府官吏ノ給料、王族ニ與フルノ年金、國家ニ勳功アリシ者ニ與フルノ年金、

攝生者ノ時王室年俸金ニ關シテ規則ヲ立ツルコト

如キハ之ヲ王室年俸金中ヨリ仕拂ハシヨリハ寧ロ政府歳入中ヨリ之ヲ仕拂フコト適當ナリト雖モ尙ホ之ヲ王室年俸金中ヨリ仕拂ヒシコト然レモ此等ノ諸費ヲ多ク以テ時々其額擔フ解テ之ヲ王室年俸金中ヨリ仕拂フコト要セザルコトナシセリ而シテ今ヨリ三世ノ即位以來二千八百十五年ニ至ルマデ斯ク王室年俸金中ヨリ仕拂フ後キ遺擔高ヲ減セタル總高ハ九百五十六万一千三百九十六磅ニ達セリ攝政子ハ攝政者トナリシ時ノ事ヲ云ハス太ノ第二ノ年ヲ經過セル後即チ二千八百十二年ニ於テ更ニ此ノ年七万磅以テ額ヲ王室年俸金中ニ加ヘ又別ニ十萬磅ヲ金額ニ攝政者ニ供給セリ一千八百十六年ニ至リ王室年俸金中ニ百零八万三千七百二十七磅ト定メタリ此金額中ニハ王ノ費用ヲモ

シヨージ四世
即位ノ時ノ王
室年俸金

含ムモノトス而シテ此時又王室年俸金費出ノ事ニ關シテ
更ニ規則ヲ設ケ王族ニ與ル所ノ年金ノ幾分ハ之ヲ王室年
俸金中ヨリ仕拂フヲ要セサレバ其費用ハ各科目ニ關
スルニ仕拂ハテ之ヲ確定シテ之ヲ監督シ且王宮ニ諸費用ハ
王室費検査官ト稱スル大藏省ハ一官吏ヲマテ之ヲ監督檢
査セシムルル見計ラセサレバ其費用ハ其額ノ幾分ニシテ
シヨージ四世ノ即位スルニ及ヒ王ハ會テ攝政者ニ受
ケシ所ヨリモ更ニ巨額ノ王室年俸金ヲ得ヌヨリ期望シテ
其額ニ人民ニ負擔ヲ課スルカ如ク其何事ニシテ其
ハズ之ヲ欲セサルノミナラス議院ハ一千八百十六年ニ於
テ定メタル王室年俸金ノ制規ハ毫毛之ヲ改ムルヲ望ミ

國王ノ他ノ歲
入

ウヰリアム四
世ノ王室年俸
金

然旨ヲ述ベテ其後ハ王室年俸金費出ノ事ニ關シテ
今ノ前王ノ時ニ如ク王室年俸金中ヨリ巨額ノ費用ヲ給ス
ルヲ要セサルカ故ニ議院ハ之ヲ減シテ八十四万五千七百
二十七磅ニ定メテ然レモ王ハ其治世間ニ於テ此王室年
俸金ノ外ニ蘇格蘭ニ屬スル所ノ國王世襲ノ歲入ヲ受ケテ
シテ其額ハ平均ニテ一年十方九千磅ニ達シ又愛爾蘭ニ屬ス
ルノ王室年俸金トシテ一年二十五万磅ノ歲入ヲ受ケテ
シ王ハ又國王及ヒ海軍省ヲ沒收權ヨリ生スル諸歲入四分
五厘ノ租稅西印度ノ租稅及ヒ其他議院ニ管轄外ニ在リテ
國王ノ權ニ屬セシ所ノ偶然生出ノ諸歲入ヲモ受ケテ
ウヰリアム四世ノ即位スルニ及ヒ王ハ始テ以上國王ニ屬ス
ル諸歲入ヲ悉ク捐棄シ唯ニ一年五十一萬磅ノ王室年俸金

金
王
金
目
分
各
科
目
三
分
テ
一
年
ノ
費
用
ヲ
指
定
セ
リ
而
シ
テ
年
金
三
供
ス
ル
費
途
ノ
如
キ
其
科
目
ノ
一
部
ヲ
テ
其
金
額
ヲ
一
ケ
年
七
萬
五
千
磅
ニ
定
ム
又
之
其
同
時
ニ
從
來
王
室
年
俸
金
中
ヨ
リ
仕
拂
ヒ
タ
ス
諸
費
用
中
適
當
ニ
政
府
ノ
費
用
ニ
屬
ス
可
得
者
ハ
之
ヲ
王
室
年
俸
金
中
ヨ
リ
仕
拂
ラ
ス
要
求
セ
ル
所
ナ
リ
即
チ
裁
判
官
ノ
給
料
外
交
官
ノ
給
料
及
ヒ
年
金
其
他
數
多
ク
諸
雜
費
ノ
如
キ
ハ
凡
テ
此
類
ノ
費
用
ニ
シ
テ
裁
判
官
ノ
給
料
及
ヒ
如
キ
ハ
從
來
一
部
ヲ
王
室
年
俸
金
中
ヨ
リ
仕
拂
ヒ
タ
ス
都
以
テ
一
部
ヲ
裁
判
所
手
數
料
中
ヨ
リ
仕
拂
ヒ
タ
ス
モ
シ
其
餘
ハ
然
レ
モ
以
上
ノ
方
法
ヲ
決
ス
ル
前
ニ
先
ツ
王
室
年
俸
金
費
途
ヲ
計

ノ
指
定
セ
リ
爾
後
此
王
室
年
俸
金
ノ
支
出
方
式
五
科
目
ニ
分
テ
各
科
目
ニ
分
テ
一
年
ノ
費
用
ヲ
指
定
セ
リ
而
シ
テ
年
金
三
供
ス
ル
費
途
ノ
如
キ
其
科
目
ノ
一
部
ヲ
テ
其
金
額
ヲ
一
ケ
年
七
萬
五
千
磅
ニ
定
ム
又
之
其
同
時
ニ
從
來
王
室
年
俸
金
中
ヨ
リ
仕
拂
ヒ
タ
ス
諸
費
用
中
適
當
ニ
政
府
ノ
費
用
ニ
屬
ス
可
得
者
ハ
之
ヲ
王
室
年
俸
金
中
ヨ
リ
仕
拂
ラ
ス
要
求
セ
ル
所
ナ
リ
即
チ
裁
判
官
ノ
給
料
外
交
官
ノ
給
料
及
ヒ
年
金
其
他
數
多
ク
諸
雜
費
ノ
如
キ
ハ
凡
テ
此
類
ノ
費
用
ニ
シ
テ
裁
判
官
ノ
給
料
及
ヒ
如
キ
ハ
從
來
一
部
ヲ
王
室
年
俸
金
中
ヨ
リ
仕
拂
ヒ
タ
ス
都
以
テ
一
部
ヲ
裁
判
所
手
數
料
中
ヨ
リ
仕
拂
ヒ
タ
ス
モ
シ
其
餘
ハ
然
レ
モ
以
上
ノ
方
法
ヲ
決
ス
ル
前
ニ
先
ツ
王
室
年
俸
金
費
途
ヲ
計

三
前
世
ノ
開
王

算
事
院
ヲ
秘
密
委
員
ニ
付
シ
テ
之
ヲ
調
査
セ
シ
ム
ル
事
至
阿
將
リ
而
シ
テ
ウ
エ
リ
ン
ト
ン
公
ノ
内
閣
ハ
此
調
査
ヲ
行
フ
コ
ト
ヲ
拒
ミ
タ
ル
由
ヲ
其
職
權
喪
失
セ
シ
カ
故
ニ
王
室
年
俸
金
取
事
ハ
續
ク
内
閣
ニ
任
ズ
所
以
シ
テ
公
民
權
黨
ノ
諸
宰
相
及
於
之
ヲ
定
ム
ル
コ
ト
ヲ
レ
リ
委員
ハ
其
調
査
ヲ
行
フ
ニ
於
テ
宮
内
ノ
事
ヲ
詳
密
ニ
穿
鑿
ス
ル
事
陛
下
ニ
對
シ
テ
禮
ヲ
失
フ
者
金
ヲ
以
テ
懲
ル
事
ト
雖
モ
尙
諸
種
政
府
官
吏
ノ
給
料
ヲ
減
少
總
計
ニ
於
テ
一
萬
磅
千
五
百
二
十
九
磅
ヲ
節
省
シ
テ
唱
答
セ
ル
事
然
レ
モ
王
室
此
節
減
ヲ
說
明
抗
シ
等
相
ニ
向
テ
之
ヲ
論
ズ
テ
曰
ク
議
院
改
革
條
例
ニ
從
ヒ
人
民
ニ
於
テ
果
シ
テ
下
院
ヲ
管
制
ス
又
下
院
ニ
於
テ
朕
カ
朕
之
政
臣
ニ
與
ル
所
ノ
給
料
ノ
額
ヲ
是
非
ス
ル
ニ
至
ラ
ハ
國
王
ノ
特
權
ハ
實
ニ
人
民
ノ
手
ニ
移
リ
テ
立
君
政
治
ヲ
實
ハ
存
ス
ル
コ
ト
能
ハ

女王ウイクト
リアノ王室年
俸金

サルベシル而シテ宰相ハ王ノ此論自從ヒテ下院ヲシテ王
室年俸金ヲ最初ノ額ニ復セシメタリ
女王ウイクトノ王室年俸金ノ如キモウイクト四世ハ王
室年俸金ト同キノ主義ニ據テ之ヲ定メ其金額ハ三十八萬
五千磅トナセリ唯二王ノ王室年俸金中著ルニテ相異ナル
ノ點ハ女王陛下前王ノ如クハ三萬年北万五千磅ノ金額
ヲ年金額給與ニ充ツル得ヌトテ斯ク年金額ハ給與シ
得ヘキ金額ヲ一千二百磅ニ限ラシタル是ハウイクト
此方法ニヨリ國王ハ其威嚴ヲ維持スル爲メ又其自身
ノ快樂ヲ爲メテ單ニ一定ノ年金額外ニ之ヲ與ル能ハ
ル事ナクナリ
我女王陛下ノ世ニ於テ作シヨル四世及ヒウイクト四世

三治世ノ間王

室ノ負債ナカ
リシコ

ノ時於テモ曾テ王室負債ノ償却ヲ議院ニ要求セシメ
テ其事ハ不事ニ之ヲ茲ニ記セテ其可カラズ是レ蓋然一
々以テ以上ノ方法ハ宜シク又得タル証據ナク可ク又
近代ノ諸王ノ施政ハ改良セシメテ其証トナス可ク
ナリ
王室年俸金ノ額ハ斯ク減セヨリ同時ニ從テ王室年俸金中
ヨリ仕拂ヒタル諸種ノ雜費ナル負債ヲ除キタル故ニ復
タ王室年俸金ノ使用ニ關シテ疑惑ヲ入ル地ナク至レ
リ國王ハ前代ニ於テ行ハレタル秘密ノ權勢ヲ廢棄シタル
カ故ニ私曲ヲ行ヒタリトシテ非難ヲ受ケルハ患テ政府ノ
費用常ニ増加スル時ハ以前ニ在テハ國王爲メニ非議ヲ受
ケサルヲ得サリシト雖モ今ヤ下院獨リ其責任ヲ當ル所ト

ハカドールノ
領地ヨリ生ズ
ルノ歳入
王ノ手金ニ
ランカスター
及ヒコロンウ
オールノ公領

ナレリ而シテ他ノ憲法上ノ進歩ニ於テ其分知シ此點ニ關
シテ陽國國王ノ權ヲ蠶食シタルカ如ク雖モ實際其眞
正ノ威嚴ニ加テ國王ノ往時其此ニ及ム一層人民ノ精神ヲ
忠愛ニシテ得ルニ至レリ
我女王陛下即位時マリス云ク其少及家累代ノ諸王ニ
リ一少歳王國ノ歳入ヲ享守有シテ雖モ今ヤ該國
英國ノ王室ヨリ分離モ亦前代ノ諸王ニ對シテ先王自
巨額ノ不動産ヲ讓受シタリト雖モ女王陛下ハ毫モ之ヲ讓
受ズ其少ナカキ然レモ其少及及ヒコロンウ
ノ公領ヨリ生ズル所ノ歳入ハ尙ホ王室ニ於テ之ヲ保存セ
リ前者ニ在位國王ノ所有ニシテ後者ニシテ其少及及ヒコ
ルノ資格ニ因リテ其少及及ヒコロンウノ所屬ニ屬スル所
ノ世襲財產ナ

ランカスター
ノ公領ヨリ生
ズルノ歳入

コロンウ
ノ公領ヨリ

リト云テ此等ノ公領ノ管理ニ宜キ夫徳久ト焦慮ス
テ國王ノ利害ニ注意スル故ニ其價額
増加ニ對シテ其少及及ヒコロンウノ公領ヨリ生ズ
ル女王陛下ノ世初年ニ於テランカスターノ公領ヨリ生ズ
ル歳入ノ總額ハ三万三千零三十八磅ニシテ其費用ハ一
万四千二百三十六磅ニシテ故ニ此費用ニ總額ヨリ扣除
スル時ハ差引八千九百十二磅餘ニ歳入純高ヲ得シ然
ルニ一千八百五十九年ニ至リ其歳入總額ハ四万五千四百
三十六磅ニ増加シ其歳入純高ハ三万一千三百四十九磅
ナレリ而シテ此純高ノ中ニ五千五百磅ハ之ヲ女王陛下ノ私
家ノ金庫ニ納メタリト云ク
ウエドル太子ヨリシテ四世ヲ指スガ一千七百八十三年ニ

生スル歳入

於テ下年未達ニシ時ニ當リコトニ依テ公領ヨリ生スル歳入額ニ係年一萬二千磅以下ナリキ女王陛下ノ位ニ即ク
ニ及ビ此公領ノ歳入總額ハ一萬八千四百五十六磅ニシテ其費用ハ一萬五千七百七十九磅ナリ然レテ以テ差引ニテ五百八十六磅ニシテ夫レ即チ王夫(按)王夫ハ公領ノ歳入總額ハ一萬八千五百五十九年ニ至リ其歳入總額ハ六萬五千七百零四磅ナリ其純入高ハ一萬五千零七十七磅ナリ而シテ此中四萬零七百八十五磅餘ノ金額ハ前代ノ諸王ハ其豫定子以財監及ヒ會計司ニ之ヲ納メタリ前代ノ諸王ハ其豫定ノ後嗣(按)豫定ノ後嗣ハ先王在世ノ時ヨリ王位繼承ノ權ヲ未下年ニ取間ハ此公領ヨリ生スルノ歳入ヲモ自ラ

國王ノ私家財

収メテ下年雖モ女王陛下ニ至テ其之未拒メテ亦寬惠ヲ行テモ謂テ可シ而シテ此豐澤ノ歳入ヨリ蓄積セシ所以金額ハ五萬磅以上ニ達シ此金額ハ太子及將來ノ利用ヲ謀ル利益ヲ生スル方法ヲ以テ之ヲ貯藏セリ以上公領ノ歳入以外ニ國王ノ其私家ノ財產ヲ對スル權ヲ姫モ亦之ヲ安全ナラシメテ王家ノ土地ノ歳入ヲ讓渡スルコトハ女王アンノ第一号ノ條例ヲ以テ之ヲ禁スル所ナリ而シテ後年ニ至リ此條例ヲ禁制ニ賣買、惠與、遺贈、相續等ニ因リ英國ノ國王若クハ女王陛下ノ人前ニテ國王其私家ノ財產ヲ得タル場合ニモ及之ヘキモ否ヤ以疑問起レ然レモ斯ク如キ禁制ハ固ヨリ毫モ正理ニ合ハサル所ナラシ以テ一千八百年ニ至リ此條例ヲ制定シ以テ之ヲ方法ニ因テ

得タル國王之財産臣民請屬スルニ所有品ト同ク隨意ニ之ヲ受授スル者得ルヲ布告セ然ルニシヨク四世ノ即位スルニ及ビ現在ノ國王カ其王位ニ即ク以前ニ得ル所ノ所有品ニ如キモ亦此條例ヲ以テ推ス可キヤ否ヤ疑問起ルニ雖モ一千八百三十二年別令ヲ發シテ此疑問ヲ定メタルニ第一等ノ勳章ヲ受ケタル者ハ其ノ王室年俸金ハ國王一身ノ威嚴ヲ維持スルニ十分ニシテ此外又議院ハ王族諸員ノ維持ヲ爲メ寛大ニ供給ヲ爲スリ即チ玉后ニ別令年俸金ヲ奉給シ且國王ヲ殂スルニ於テハ巨額ヲ贈呈ス爲メ又國王ノ兄弟姊妹及ヒ其他ノ近親者各々年俸金ヲ奉給シ又諸王子及諸其下年輩連スル者至リ各々之ニ定額ニ費ヲ奉給シ又王家ノ諸女ニハ其婚姻

王族俸給金

國王ノ海流俸

料ヲ奉給セリ王室カ王室年俸金ノ外ニ議院ニ要求スル所則チ此ノ如キナリ且シヨク三世ノ時ニ於テハ此外ニウールス太子(按シヨク)ノ負債ヲ加ヘサル可カラサルナリ蓋シ太子カ一千七百八十三年ニ於テ其可年ニ違スルヤ當時ノ有様ハ國庫ニ向テ多額ノ要求ヲ爲サンニハ頗ル不都合ノ時ナリト云フ可シ人民ハ當時尙ホ亞米利加戰爭ノ爲メニ累積セシ所ノ負擔ニ苦ミ且王室年俸金濫用ノ事ハ幾ニ世ニ暴露セリ然ルニ夫ノ聯立内閣ヲ組織セル所ノ太子ノ民權党ノ朋友ハ以上ノ事情ヲモ慮慮セシテ一ケ年十萬磅ノ金額ヲ奉給セシヲ開陳セリ實ニ諸宰相ハ此機ニ乘シテ豫定ノ後嗣ト其政治上ノ親和ヲ鞏固ニセシト喜

ウールス太子ノ負債

モシナリ然レモ當時ノ事情ニ於テ此ノ如キ處置ニ出ツル
 以非ナルコトハ諸宰相ヨリモ却テ王(按)三世ヲ指ス能ク之ヲ
 知レ且王自家ノ權力ヲ貪リ太子ヲ愛スルヲ薄ク又大
 ニ諸宰相ノ惡ミシヲ以テ太子ヲシテ獨立セシメ且之ヲ
 テ王ノ最モ惡ム所ニ政党内親和セシムル如キ方法ニ一
 スル能ハサルナリ故ニ王ハ自家ノ王室年俸金ヲ既ニ其
 費用ヲ充ツルニ足ラサルニモ拘ハラシテ尙ホ此内ヨリ一
 年六万磅ヲ太子ニ與ヘシヨリ議院ニ要求
 得可キ金額ヲ六万磅ノ特別ナル補助額ノミニ制限セリ蓋
 シ謹慎ナル太子ニ取リテ此ノ如キノ配與ヲ得十分ナ
 ルニシテ雖モ放蕩ニシテ且賭博ヲ耽ル所ノ太子ニ取テ
 此等ノ配與ハ少額ニシテ故ニ太子ハ速ニ困難ニ陥リニシ

マケツ下ノ賭博者及ヒモシトシテムスノ欺瞞者ニ名譽ノ
 負債(按)名譽ノ負債トハ至極粗畧ノ證書ヲ以テ借受ケタル
 負債ヲ云フ賭博場ノ貸借等凡テ此方法ヲ以テタル
 ナリナ仕拂ヒタル後ハ殆ノ誠實ノ商人ニ給ス可キノ殘
 額ヲ餘サタルナリ一千七百八十六年王室年俸金ヲ改正ス
 ルニ當リ太子ノ黨友ハ再ヒ一層多額ノ奉給金ヲ太子ニ得
 セシメシテ勉メタリト雖モピット氏無情ニ之ヲ容レズ
 王亦之ヲ拒ミテ動カス可カラサリキ因テ太子ハ其定額費
 ヲ廢シタリト雖モ尙ホ其負債ヲ償フニ足ラサリキ
 一千七百八十七年太子ノ有様切迫如何トモス可カラサル
 ニ至リシカ此時倫敦府ノ長老役ノ一人ノ親懇ナル仲裁ニ
 ヲリ幸ニ太子ノ零落ヲ救フヲ得タリ蓋シ長老役ノ一人オ
 ルニコウハ氏ハ下院ニ於テ太子ノ負債ノ事ヲ王ニ奏陳セ

ントノ通知ヲ爲シタリシニ此事ハ太子ノ黨友ノ大ニ贊ス
 ル所トナリシヲ以テ王ニ於テモ協和ノ談判ニ出ルヲ良策
 ナリト思惟セリ是ヲ以テ王室年俸金中ヨリ更ニ一万年一
 萬磅ヲ分テ之ヲ太子ノ歳入ニ加ヘ又議院ニ於テ太子ノ負
 債償却ノ爲メニ十六萬一千磅ト其カールトン、ハウズノ宮
 殿ノ爲メニ二萬磅トヲ供給スルコトニ決セリ爾後議院ニ於
 テ巨費ヲ要スル所ノ此宮殿ヲ建築ヲ成就セシメンカ爲メ
 ニ時々供給セシ金額ノ總計ハ六萬三千七百萬磅ニ下ラサ
 リキ此宮殿ハ華美壯麗ヲ極メシト雖モ甚ク風致ニ乏シカ
 リシカ僅ガニ二十五年餘ヲ經過シテ都府ノ改良ヲ行フ爲
 メニ其地面ヲ要セシヲ以テ之ヲ破壊セサル可カラサルニ
 至レリ王ハ太子カ爾後其歳入ノ金額内ニ費用ヲ制限スル

ヲ約シタル旨ヲ下院ニ証言シタリト雖モ太子ハ此等ノ
 其目的ヲ履行セザリシノミナラズ一千七百九十三年ニ至
 リ其負債ノ三十七萬磅ニ登リシトマールムスブリー公ニ
 自カラ明言シタリキ一千七百九十五年ニ至リ其負債ハ更
 ニ増加シテ六十五萬磅ノ巨額ニ達セシヲ以テ止ムヲ得ス
 プランズウツクノカロリント彼ノ不幸ナル婚禮ヲ行ヒ爲
 メニ右負債ノ困難ヲ免ルヲ得タリ蓋シ議院ニ於テ此等
 ノ負債ヲ償却センカ爲メニ金額ヲ贈呈スルカ如キハ固ヨ
 リ論外ノ事ニシテ決シテ行フ可カラサル所ナリト雖モ議
 院ハ別ニ一ヶ年六萬五千磅ノ金額ヲ太子ノ年金ニ加ヘタ
 リ而シテ多年ノ間ハ此等ノ金額ハ殆ント全ク之ヲ負債ハ
 償却ニ充テタリ一千八百三年ニ至リ更ニ六萬磅ノ金額ヲ

政府ニ代リテ
土地ノ歳入ヲ
管理スルノ方
法其宜シキヲ
得サリシト

太子ノ歳入ニ加ヘ之ニ因テ始テ其負債ヲ完償スルコトヲ得
タリ少年ノ間過度法外ノ事ヲ喜ヒテ放蕩ナル此太子ハ
老年ニ至リ公費ヲ以テ宮殿ヲ建築修繕スルコトハ尙ホ之ヲ
好ミシト雖モ自家ノ財産ハ極メテ之ヲ吝愛シ殆ト守錢奴
ノ狀アリキ然レモ其負債ノ完償ニ當テハ其歳入ノ半ニ
爾後議院ハ王族ノ各員ニ對シテ適當ノ金額ハ喜ミテ之ヲ
供給セリ而シテ王族ハ其負債ノ償却ヲ議院ニ要求シテ議
院ノ寛大ナルヲ輕視スルガ如キコトハ復タ之アラザリキ
シヨトシ三世カ國王所屬ノ土地ヨリ生スル歳入ヲ政府ニ
讓リテ其代償トシテ一定ノ王室年俸金ヲ受ケタルコトハ既
ニ之ヲ記シタリ然レモ此等ノ歳入ヲ管理スルノ方法其宜
シキヲ得サリシカ爲メニ政府ハ其正當ニ享有シ得ルキ利

益ノ大半ヲ久シク失ヒタリ蓋シ土地貸渡証ヲ付與スル
ハ不正ノ方法ヲ以テシタリ假令不正ノ方法ヲ以テセリト
云フヘガラサルモ濫ルコト之ヲ付與シテ毫モ慮ル所アラ
ザリシチリ故ニ往々土地ヲ測量セサルコトアリシニチラ
甚タシキハ王有地ノ監督官ニ於テ國王ノ爲メニ土地貸渡
証ノ寫書ヲ保存スルヲ爲サザルコトアリキ又貸渡証ノ切替
ヘハ借地人ノ望ニ應シテ猥リニ之ヲ許容シ且諸役所ニ仕
拂キキ所ノ高價ノ借地謝銀ハ之ヲ借地人ニ課セズシテ土
地讓渡認許料中ヨリ之ヲ引去リタルコトヲ以テ王室ノ歳入ニ
對シテ苛重ノ負擔トナリタリ斯ノ如クシテ少ナクモ土
地價格ノ八分ノ七八土地讓渡認許料トシテ之ヲ受取リシ
者ニシテ借地料トシテ受取リシハ僅ニ八分ノ一ニ過キサ

ルナリ而シテ此等ノ土地讓渡認許料ハ高價ノ利息ヲ以テ
 之ヲ算シタルカ故ニ更ニ王室ニ納ムヘキノ金額ヲ減シタ
 リ(按)土地讓渡認許料ヲ前拂スルハ高價ノ利息ヲ以テ之
 高價ノ利息ヲ以テ見ヘタリ斯ク土地讓渡認許料ヲ受取ルニ
 スルカ故ニ受取ル所ノ金額ハ大ニ減スルナリ
 王有地ヲ蠶食シ又ハ之ヲ荒廢スルト頻リニ行ハレテ殆
 之ヲ制スルコトアラザリキ然レトモ此ノ如ク管理ニ宜キ夫
 得サリシ者ハ政府ハ利益ヲ守護セシムルガ爲メニ任
 所ノ官吏ノ數ノ少ナキニ因ルニアラズシテ反テ其數ヲ多
 キカ爲メニ詐僞騙瞞ヲ行ヒ易カラシメタリ此等ノ官吏ハ
 互ニ檢束シテ相戒ムルコトナク各自別々ニ事ニ當リタリ而
 シテ其無職無能ニシテ且懶惰ナルカ爲メニ大ニ其委托セ
 ラレタル土地ヲ荒廢セシムルニ至レリ當時ノ制度ノ如何

ナリシ乎ヲ証ス可キ一例トシテ一人ノ土地拜領者ニシテ
 再度地稅ノ配與ヲ得シト屢々之アリシトスニ事實ヲ玆ニ
 記ス可シ而シテ此等ノ錯誤ノヨリ生ズルノ損失ハ雖モ
 一ケ年一千五百磅以上ヲ登リタリキ且夫レ斯ノ如ク管理
 ノ方法ヲ失スルコトナシトスルモ王有地ハ各所ニ散在セル
 ヲ以テ監督及ヒ取扱ノ費用隨テ多カラザルヲ得サレタリ
 以上種々ノ原因アリシヲ以テシヨリ三世即位以來二十
 五年ノ間ハ王室ノ良美ナル土地ヨリ生ズル所ノ歲入純高
 ハ一ケ年平均六千磅ニ過キサリキ一千七百八十年ホドク
 氏ハ此等ノ弊害ノ或ル者ヲ暴露シ且氏ハ之ヲ救フノ策
 ノ悉ク王室ノ土地ヲ賣拂ハンコトヲ説キタリ一千七百八十
 六年ニ至リ王ハピット氏之助言ヲ採リ王室ノ森林及ヒ土

地ノ實況ヲ調査セシメテ其後ニ於テ其地ノ管理ニ關シテ其地ノ所有權人ノ利益ヲ保護スル所ノ書ヲ議院ニ送リテ
 リ故ニ右ノ調査ヲ行ハシメ且管理ノ方法ヲ改良スルノ策
 夫立憲國ニシテ其地ノ管理ニ關シテ其地ノ所有權人ノ利益ヲ保護スル所ノ書ヲ議院ニ送リテ
 シテ此等ノ委員ヲ選ニ從ヒ遂ニ一千七百九十四年ニ至リ
 二條例ヲ制定シ此條例ニ由テ土地ノ歲入ヲ管理スルノ方
 法ヲ改良シ且其歲入ヲ增加スルノ手段ヲ行ハシメ且委員
 其說ヲ報告シテ曰ク從來彼ノ如ク些少ノ歲入ヲ生シタ
 ルノ土地ニ雖モ改良セル管理法ヲ行ハシメ於テハ或ハ一
 年四十万磅ニ下ラザル歲入ヲ生スルニ至ルヲ云フ然レ
 而當時ノ制度ニ因テ現ニ利益スル所ハ人々ノ不滿意故ニ
 朝廷ニ於テ改革ヲ行フニ難ク一時人間ハ右委員ノ望望屬
 セシ豫算ヲ實取スルヲ能ハサリシカレ一千七百九十八年

王室ノ土地ヨ
 リ生スル歲入
 ノ支消

一 王室ノ土地ノ價格ハ二十萬零三千二百五十磅ナリ
 一千八百十三年ニハ其價格ハ二十八萬三千一百六十磅ナ
 リ一千八百三十年ニハ現價十三萬四千八百五十三磅ニ
 歲入ヲ生シ一千八百三十年ニハ三十七萬三千七百七十五磅
 ノ歲入ヲ生シ終ニ一千八百六十年三月三日ヲ以テ終ル所
 ノ一週年度ニ於テハ四十四萬六千五百三十磅ノ歲入ヲ生
 スルニ至リタリ
 然レ而王室ノ土地ヨリ生スル歲入ノ殆メト王室年俸金ノ
 額ト同一ノ高價達シタル後ト雖モ尙ホ此等ノ歲入ヲ大部
 ハ之ヲ出納局ニ収ムルヲ能ハサリシナリ蓋シ從來王室之
 土地ト森林トハ各々之ニ屬スルノ監督官アリテ其事務ヲ
 取扱ヒタリト雖モ一千八百十年ニ至リ土地及ヒ森林ヲ管

理スル所ノ委員ヲ設ケテ此二役ヲ合併セリ一千八百三十
 二年ニ至リ右委員ヲシテ更ニ土工監督ノ事ヲ兼テシ
 メタリ是ヲ以テ委員カ右手ニ受取リシ所ノ金額ハ直ニ左
 手ヲ以テ之ヲ消費スルノ弊害ヲ見ルニ至レリ即チ王室ノ
 所有品ヨリ生スル所ノ歳入ハ直チニ之ヲ土工及以其他ノ
 改良事業ニ消費スルノ患アリキ故ニ出納局ハ王室年俸金
 ノ代價トシテ受領セサル可カラサル所ノ資金ヲ受領スル
 一能ハスノ議院ハ其當然ニ監督スルべき公費中ノ緊要ナル
 一科目ヲ監督スルノ權ヲ實際ニ有セザリキ而シテ此等ノ
 弊害ヲ匡救セシカ爲メニ事務取扱上ニ更ニ變革ヲ行ハサ
 ル可カラサルニ至レリ故ニ一千八百五十一年ニ至リ再ヒ
 森林及ヒ土地ヲ管理スルノ局ト土工ヲ管理スルノ局トヲ

王室年俸金中
 ヨリ仕拂フ所
 ノ年金

王室ノ土地ニ

分離セシテ以テ爾來ハ王室ノ所有品ヨリ生スルノ純入高
 ハ其何タルヲ問ハヌ悉ク之ヲ政府ノ歳入トナシ土工ノ爲
 メニ要スル所ノ金額ハ凡テ議院ニ於テ政府一般ノ歳入中
 ヨリ之ヲ供給スルコトナレリ
 王室年俸金中其大部ハ年金ヲ與ヘンカ爲メニ之ヲ消費ス
 ル者ニシテ此事ハ獨リ今代ヲ除ク外ハ累代皆然リシ所
 ナリ而シテ王室ニ於テ年金ヲ與フルハ是非ハ屢々政治正
 ノ問題トナリシ所ナルヲ以テ茲ニ從來年金ヲ與フルニ於
 テ證據セシ所ノ法律ト習慣ト及ヒ此等ノ年金ヲ如何ナル
 資金ヨリ生スル乎トヲ簡單ニ説明スルハ決シテ憲法上ノ
 考察ニ利益ナシトモサルヘシ
 女王ヲシノ時以前ニ在テハ國王ハ其世襲歳入中ヨリ恩賞

年金給與の負擔ヲ課スルヲ禁スル

及ニ年金ヲ與之ルノ權ヲ行ヒ且ツ國王ニ於テ此ノ如ク年金給與ノ負擔ヲ其世襲歳入ニ課スル時ハ國王ハ其繼續者ヲシテ之ヲ遵守セシムル權ヲ有スルヲ認行ハレ然レモ一千七百一年於テ女王アリスノ即位スルニ及ヒ議院ハ始テ王室ノ土地ヲ讓渡スルヲ禁シ此時又議院ハ國王於テ王室世襲ノ歳入ヲ讓與スルモ其期限ハ國王ノ一生間ヲ限リトシ決シテ此期ヲ超ユ可カラズト制定セリ然レモ右ノ條例ハ英蘭ト蘇格蘭トノ合併以前ニ制定セル者ナレバ此條例ハ蘇格蘭王室ノ世襲歳入ニ及フモノニアラザルナリ又愛蘭國國會ニ於テモ之ト同一ノ條例ヲ設ケテ愛蘭王室ノ世襲歳入中ヨリ年金ヲ與スルヲ禁セシムル未ダ之アラサルナリ又以上アンノ條例ハ夫ノ四分五厘ノ

國王世襲ノ歳入ヨリ仕拂フ所ノ年金

租税ニ及ラ者ニ限ラザルナリ而シテ此條例制定後ハ唯モ在位國王ノ一生間ニ限リ英蘭ノ王室世襲歳入中ヨリ年金ヲ與ルヲ得ル者ナリト雖モ尙ホ實際ニ於テハ斯ク先王與ヘシ所ノ年金ハ諸王即位ノ初メニ於テ改メテ之ヲ與ルルノ習慣ナリキ又蘇格蘭及ヒ愛蘭ノ王室世襲歳入ト四分五厘ノ租税ヨリ仕拂フ所ノ年金ハ其拜受者ノ一生間ニ續テ之ヲ與ヘタリシテ王室ノ世襲歳入中ヨリ年金ヲ受ケルシヨリ三世ノ即位スルニ及ヒ王ハ王室年俸金ヲ受ケルノ代償トシテ英蘭ノ王室世襲歳入中大額ヲ捐棄セシテ以テ從來世襲歳入中ヨリ仕拂ヒタル年金ハ爾後王室年俸金中ヨリ之ヲ仕拂フコトナレリ而シテ苟モ王室年俸金ヲ以テ其仕拂ニ應シ得ヘキ限リハ別ニ年金ノ高ニ制限アルナ

シヨリ三世ノ王室年俸金中ヨリ仕拂ヒタル年金

世人年金ヲ嫉
惡スルヲ

ク又年金ヲ與フルハ一ニ國王ト其助言者トノ意志ニ因ル
者ニシテ別ニ之ヲ制スルノ規則アラザリシナリ
國王ニ於テ年金ヲ授與ス可キ無限ノ權力ヲ有スルヨリ生
スル所ノ費用ハ世人ノ最モ嫉惡スル所ニシテ如何ナル公
費ト雖モ世人ノ之ヲ嫉惡スルコト之ニ如クモノアラサルナ
リ蓋シ年金ヲ與フルハ王室ノ負債ヲ起ス所ノ大原因ノ一
ニシテ人民ニ取テ苛重ナル負擔ヲ生スルノミナラス又之
カ爲メニ國王ノ權勢ヲ加ヘ議院ノ獨立ヲ害スルノ効アレ
ハナリサレハホルク氏カ一千七百八十年ニ於テ其財政改
革策ヲ提出スルヤ氏ハ年金ノ高ノ多キニ失シ且之ヲ制ス
可キ適當ノ規則ヲキコサ論シ又氏ハ秘密ノ授與狀ヲ以テ
國王ノ隨意ノ期限ノ間年金ヲ與フル所ノ當時ノ習慣ノ非

一千七百八十
二年ニ於テ年
金授與ノ事ニ
制限ヲ立ツル
ヲ

ナルヲ特ニ痛論セリ實ニ此事ノ如キハ據テ以テ危險ナ
ル私曲ヲ行フノ患アレハナリ而シテ氏ハ英蘭ノ年金ヲ漸
次ニ減少シテ終ニ六万磅ニ至ラシメ又年金ヲ與ルハ勳功
ヲ賞スルト真正ノ慈善ヲ行フトノ二事ノミニ限リ且今後
非常ノ事アル場合ニ於テハ上下兩院ノ奏陳ニ因テ之ヲ處
スルコトニ定メノコトヲ説キタリ
一千七百八十二年ロッキンガム公ノ内閣ニ於テ制定セシ所
ノ王室年俸金條例ハ因リ大ニ年金授與ノ權ヲ制限セリ即
チ年金ノ總高ノ九万磅ニ減スルマデハ一年三百磅以上
ノ年金ヲ新タニ授與ス可カラサルコトナリ又一年間ニ新
タニ授與ス可キ年金ハ常ニ六百磅ニ越ユ可カラヌトナシ
且其年金ノ授與狀ハ悉ク之レヲ議院ニ示サ、ル可カラサ

愛爾蘭ノ王室
世襲歳入ヨリ

ルトナシ又今後年金ノ総高ハ九万五千磅ニ超ニ可カラ
ストン制限ヲ立テ又一千三百磅以上ノ年金ヲ一人ニ授與
ス可カラサル事トナセ此ノ條例ハボルグ氏ノ主義ヲ十
分ニ認メシテノミテ其條例中ニ殆ント氏ノ同ニテ言語
ヲ以テ隨意ニ期限ノ間秘密ノ年金ヲ與フルノ習慣行ハ
ルガ爲メ今後隱密ニシテ且危險ナル私曲ヲ行フニ至ル
ヘキ正ヲ述ヘタリ而シテ此ノ條例ニ於テ今後ハ一切ノ年
金之レヲ出納局ヨリ仕拂フト定メタリ且又此條例ニ
於テ年金ヲ與ルハ困窮セル人ニ惠與スルト勳功ヲ賞スル
トノ二事アルノミニ限ラサレ可カラストン主義ヲモ認メ
タリ

英蘭ノ年金ハ上記スル如キ制限ハ議院ノ監督トテ受ク

仕拂フ所ノ年
金

此ニ至リシト雖モ國王ニ尙ホ政治上若クハ私事上不服務
ヲ賞スルノ資金ヲ生スベキ他ノ泉源ヲ有スルナリ愛蘭ノ
王室世襲歳入ハ其純入高二十七万五千一百零三磅ニシテ
此歳入ハ尙ホ國王ニ於テ隨意ニ之ヲ支消シ得ルノ事ナ
ス又將來ノ國王ヲ束縛スル如キ方法ヲ以テ此等ノ歳入
人ニ賜與スルコトヲ得ルナリ故ニ此等ノ便益ナル資金ニ向
テ大ニ年金ノ負擔ヲ課スルニ至ルル亦怪ム事足ラサ
ルコトニシテ此等ノ歳入ハ實ニ各種ノ方法ヲ以テ之ヲ賜與
シタリ即チ或ハ國王隨意ノ期限ノ間之ヲ賜與スルナリ或
ハ國王一生ノ間之ヲ賜與スルナリ或ハ一定ノ年限ノ間又
ハ拜受者ノ一生ノ間之ヲ賜與スルナリ或ハ既生ノ數人ノ
生命ノ間之ヲ賜與スルナリ或ハ豫約ノ方法ヲ以テ之ヲ賜

與スルアリキ而シテ此ノ如キノ賜與ヲ行フニ關シテ毫
 モ制限ナカリシヲ以テ隨テ年金ノ額ハ絶ヘズ増加シタリ
 シカハ國王カ斯ク年金ヲ濫與シテ財貨ヲ浪費スルノ非大
 ルトハ久シク世人ノ憂フル所ナリシヲ一七五十七年
 夙ニ愛爾蘭ノ下院ニ於テ國王カ公金夫浪費スルヲ斯ク巨額
 ノ年金ヲ賜與スルハ是レ無謀ニ歳入ヲ支消スル者ニシテ
 王室及ヒ人民ニ有害ナリトシテ議院全會ノ一致ヲ以テ決
 シテアリタリキ然ルニ年金ノ額ハ一七五十七年ニ於
 テハ四万磅ナリシニシヨリ一七三三ノ即位以來三十年間ニ
 其額ヲ三倍シ一千七百九十三年ニ於テハ十二万四千磅ノ
 巨額ニ達シタリ而シテ今ヤ弊害露發シテ最早之ニ忍ブ
 能ハサリシヲ以テ該年政府ハ自カテ變革ヲ行フノ議ヲ出

且其議ニ愛爾蘭議院ノ容易ニ採用スル所トナヒリ蓋シ國
 王ハ英蘭ノ王室世襲歳入ヲモ捐棄シタルカ如ク今又
 愛爾蘭ノ王室世襲歳入ヲモ之ヲ捐棄シ其代價トシテ十四
 万五千磅ノ王室年俸金ヲ受ケタリ尤モ此王室年俸金中ニ

ハ國王ノ與フル所ノ年金ヲ含マサル者トス而シテ當時年
 金授與ノ總高ハ十四万五千磅ニシテ到底之ヲ八万磅ニ減
 セサル可カラサルトナシ斯ク其年金ハ減スルニ至ラハ國
 王ハ一ケ年一千二百磅以上ノ年金ヲ設テ賜與スルヲ大
 得スト定メタリ然レモ國王ハ尙ホ終身年金ト豫約年金ト
 ヲ與フルノ權ヲ保持シテ之ヲ行ヘリ一千八百十三年ニ至
 リ愛爾蘭ノ年金ハ始テ此條例ノ企圖セシ所ノ如ク八万磅
 ニ減少セリシヨリ四世ノ位ニ即クニ及ヒ愛爾蘭ノ年金

蘇格蘭ノ王室
世襲歳入ヨリ
仕拂フ所ノ年
金

四分五厘ノ租
税ヨリ仕拂フ
所ノ年金

ハ更ニ減シテ五万磅ナレリ而シテ其年金ノ斯ク減ズル
マテハ此ノ年ニ千三百磅以上ノ年金ヲ新法ニ賜與スル
ヲ禁シタリキ
蘇格蘭ノ王室世襲歳入則チ千八百半半至ルニ至
議院ノ管轄外ニテ而シテ該年ニ於テ此等以世襲歳入
ヨリ仕拂フ所ノ年金ノ額ハ三萬九千磅ナリシガ議院ハ此
等ノ年金ノ三萬五千磅ニ減ズルマテ既ニ去年八百磅以
上ノ年金ヲ新法ニ賜與ス可ラサルヲ決定シ且チ去年三百磅
以上ノ年金ヲ大ニ賜與スル能ハズルヲ定メテ隨テ大國
以上以外ニ尙ホ一資金ヲ議院ノ管轄外ニテテ隨テ大國
年金ヲ負擔ス課セラレタル者アリ是レ即チ四分五厘ノ租
税ヨリ此租税ハ一千八百三十年ヨリテ四世カ此租税

年金ノ合併

一千八百三十
七年ニ定メタ
ル年金ノ規則

ヲ捐棄セシメテ議院以權ニ歸シサリキ而シテ國王カ從
來既ニ賜與セシ所ノ年金ハ尙ホ政府ニ於テ之ヲ仕拂ハリ
又此時ニ於テ英蘭及愛蘭ノ年金ヲ合併シ且
合同王國ノ年金總額以當時十四萬五千七百五十磅ナリ
ニ之ヲ減シテ七萬五千磅トナシ而シテ其年金ノ殘額
「コンソリデーテッド」ト稱スル公債償却資金ノ中ヨ
リ之ヲ仕拂ヒタリ
終ニ我女王陛下ノ即位スルニ及ビ國王ノ年金ヲ賜與スル
ノ權ヲ二ヶ年一萬二千磅ノ金額ニ制限セリ而シテ一千八
百三十四年二月十八日ノ下院ノ決議ニ從ヒ此等ノ年金以
正當ニ國王ノ恩賜ヲ要求シ得ル人々ト國王ハ對シテ上
身正ノ勤務ヲ爲シ又ハ國家ニ對シテ義務ヲ尽シ又ハ學術

上有益也此發明ヲ爲シ又公文學技藝ニ熟達セル等ノ爲ニ國王ノ嘉認ト國民ノ感謝トヲ博スルニ足ル如キ人々トシテ之ヲ賜與ス可キコトヲ定メテ之ヲ同時ニ下院金現存ノ年金ヲ調査セシメテ或シ或シ拜受者ニ於テ自ラ其年金ヲ捐棄セシ者モアリ又下院ヨリ之ヲ中止シ若クハ廢止シタル者モアリキ

此ノ如ク年金ノ額ヲ減シ且之ヲ關シテ適當ノ規則ヲ立テタルヲ以テ復タ此事ヲ關シテ憲法上ノ嫉惡ヲ入ルル地ナキニ至リ蓋シ最早年金ヲ以テ私曲ヲ行フノ手段トナシテ能ハス又之カ爲メニ大ニ國王ノ權勢ヲ加フル所アリシメテ且人民ノ之カ爲メニ受ルノ負擔ハ甚ク輕微ナリトス而シテ此等ノ國王ノ恩賜金ヲ拜受シタル人々ハ概テ皆

一十八百二十

平

國王カ其王族ニ對スルノ權力

尊敬ス可キ人々ト哀憫ス可キ人々トヲ以テ敢テ之ヲ濫與スルカ如キコトナキニ至リテ國王及ヒ王族カ議院ニ對シテ金錢上ノ關係ヲ以テ論スルカ如シ今請フ在位國王カ王族ニ對シテ之ノ關係ヲ簡短ニ觀察セシメ

蓋シ國王カ王族ニ對スルノ權力ハ單ニ父母タルノ權力ト止マラスシテ實ニ之ヲ國王ノ特權中ニ列ス可キナリ而シテ一千七百七十三年ニ於テ王^(按)三世^(指)此權力ヲ張ラシカ爲メニ議院ヲ補助ヲ求メタリ蓋シクローゼスタ^(按)第二弟^(ハ)ウアルドグレイ^(公)寡婦ト結婚シテ既ニ數年ヲ經タリト雖モ此女ハ公^(ノ)妻ナリト公認セラレヌシテ又公^(ノ)名爵ヲ犯サリキ故ニ此女ハ宮廷ニ於テハ公^(ノ)妻ナリ

クローゼスタ
公ノ結婚

ト認テラレサリシト雖モ又公ノ妾ナリテ賤遇セラレ

シニモアラヌ妻タルノ資格ニモアラヌシテ其中間ノ賤昧

ナル位置ヲ占ムル者ナリキ

ニ千七百七十一年ノ秋ニ至リ王ノ第三弟カムベラソ

公ハホムル下ニト結婚セシト王ニ通知シ而シテ公ハ此女

ヲシテ現ニ自家ノ名爵ヲ稱ヘ後世ヲコトアリキ此女ハ

シハム公ノ女ニシテ彼ノ王党ノ周旋ニヨリウレシト代

案ニツドルセツキスノ議員ニ選舉セラレタル有名ナルコロ

示ルラツテレルヲ妹ナリト實ニ奇遇ノ事情ナリ云

可ト蓋シ王ノ妹ヲシテ嚴罰令被シト雖モ却テ彼ノ爲

ニ勝利ヲ占マラレテ其復仇ヲ受ケサルヲ得ナリキ而シ

テテシトシルノ如キ王ノ弟ナリト云フ歴スルニ於テ其機

カムベラソ
ド公ノ結婚

國王其王
其王

關トセシ所ナリ雖モ今王トシテ親族ノ爲メ
 三耻辱ヲ受ルニ至レリ(按)ウレシト初メ内ニシテ
 罪ト爲テ其議員ノ席ヲ失ハレ而シテ三回及ビタルト
 キト下院ノ爲ニ議員ヲ無効トシテ區ノ議員トシテ内閣
 ニヨリテラツトレルヲ舉ゲテ同區ノ議員トシテ然ルニ周
 一ヤカニ結婚セシト公ハ身ヲ族ノ以テ自家ノ恥辱ナリト
 トソカニ結婚セシト公ハ身ヲ族ノ以テ自家ノ恥辱ナリト
 惟モ事ヲ云フ本ナリ蓋シ王カ玉カニシテ公及ヒホル
 トノ宮廷ニ出入スルヲ禁セシラテ何人ト雖モ宮
 廷ニ出入セシテ欲スル者ハ公及ヒ公ノ夫人ハ交際ス可
 カラズル旨ヲ令シテ初メ王ハ其カニシテ公ノ結婚
 夫無効ナリトスルニ至ル可シテ其望有セザルニテ
 ナリキ何トナレバ法律決定スル所ノ通常ノ儀式ヲ舉行セ
 ナシテ結婚シタル者ナレハナリ然レドヨリテ三世ノ命

令ニヨリ王族ヲハトドウツク公ニ制定セル婚姻條例ノ限
 外ニ除キタルヲ以テ王族ニ此條例ヲ遵守ルヲ要セサルナリ
 蓋シテヨリ三世ハ人民中ニ施サシカ爲メニ制定セシ所
 ノ制限ヲ自家ノ王族ニ課スルヲ欲セザリシナリ然レモ現
 行法律ノ定ムル所ノ制限アルモ或ハ之カ爲メニカキ
 ヘルランズ公此惡ム可キ結婚ヲ延期シ若シハ之ヲ阻害
 スルニ至ルコトナキヲ保セズ是レ王カ此結婚ヲ無効ナリト
 スルニ至ル可キコトノ冀望ヲ有セシ所以ナリ而シテカキ
 ルランズ公ハ斯ク臣民ノ女ト結婚シ又之ニ次キ公ト
 スル公ハ其結婚ヲ公然明言スルニ至レバ若シ公ニシテ
 之ヲ明言セズ久シク曖昧ニ附シテスランズ公ハ世情ノ
 寛恕ヲ得テ王モ亦激怒シテ條例ヲ制定スルニ至ラズシテ大

國王其孫ニ對
スルノ權力

王ハ今其王族ノ將來ノ婚姻ニ關シテ曾テ人民ノ婚姻ニ關
 シテ企畫セシコトヲサテ如キ嚴カク制限ヲ立テ可キ決
 心セリ然ルニ若シ果シテ王家ノ血統ニアラサル人ト結婚
 スルコトヲ王族ニ禁スルニ於テハ之カ爲メニ王家ノ諸子
 シテ法律ヲ犯サシムルノ危険アルコトハ王及ヒ王ノ諸弟
 品行ニ就テ之ヲ証ス可キナリ蓋シテ王ハ其若年ノ時貴女
 ラレレシコトヲシテ寵愛シ又ヨリ公（按）王ノ第一弟ノ如キ貴
 女ヤリコトコトクニ戀着シタリキ然ルニ今ヤ王ハ其諸弟ノ
 結婚ノ不當ナルヲ痛歎セリ
 原來王族ノ事ニ關シテ國王カ求ムル所ノ權力ハ既ニ甚
 大ナリトス一千七百十八年ヨリ今ニ至ルニ世カ公然其太子ト

一千七百七十

相敬視セシ時王公國王ヲ奉者ト特權ニ因リ王其諸孫ノ
 教育ヲ管理ニ加之其婚姻之事ヲ指揮スル權アリトテ説
 キ且太子カ父トシ然有ル所ノ權力ハ此等ノ事ニ及フ者
 ナラサルコトヲ主張セリ此疑問然之ヲ判事三付テ然レシ
 三十二人ノ判事中十八人悉ク判事長(カ)氏(氏)ハ後員
 至マツテアレス(カ)公ト稱ス)ノ説ニ與テシテ王ヲ要求
 シ可キスルノ判斷ヲ下シテ判事異説ヲ唱テ三人
 ノ判事ハ王ノ諸孫ノ教育ニ其父ノ權ニ屬スル者ナラズ
 説ヲ持シタルニモ拘ラス尙ホ王ノ諸孫ノ成長スルニ及
 テ其婚姻ノ事ヲ周旋シ及ヒ之ヲ認可スルノ權ハ我國王
 屬スル者ナリト論テ判事三付テ然レシ判事三付テ然
 然ルニ今ヤ法律ノ力ヲ以テ國王ノ此等ノ特權ヲ擴張セン

二年ノ王族婚
姻條例

トスルニ至レリ一千七百七十二年王ハ書ヲ上下兩院ニ送
 リ王族ノ婚姻ヲ認可スルノ權ハ公事ニ關スルノ故ヲ以テ
 從來國王ノ有スル所ナルカ今回更ニ之ヲ有効ナラシメ
 [一]ヲ望ミ且前王(ヨリ)二世ノ子孫(外國ノ人ニ婚姻セル
 諸王女ノ産セシ)所ノ諸子ヲ除キ)ハ王ノ認可ヲ經スシテ婚
 姻ヲ行フ能ハサルコトニ定ムルノ利害如何ヲ討議セヨトテ
 兩院ニ求メタリ(カ)上院ニ提出セリ而シテ此條例案以
 翌日王族婚姻條例案以上院ニ提出セリ而シテ此條例案以
 例言中(王カ前日)書ニ於テ求メシ所ノ特權ヲ十分ニ確
 言シ又王ノ要求ノ賢ニシテ且利ナルコトヲ述ヘタリ此條例
 案ニ於テ制定スル所ヲ舉レハ曰ク(ヨリ)二世ノ子孫(外
 國ノ人ニ婚姻セル)諸王女ノ産セシ所ノ諸子ヲ除キ)ハ凡テ

王族ノ婚姻ニ
 關シテ王ノ要
 求セシ所ノ特
 權

豫メ王ノ認可ヲ經テ之ヲ婚姻ヲ行フコトヲ得ス又王ノ認可
 狀ニハ王手ツカラ之ニ記名シ樞密院ニ於テ之ヲ宣告ス可
 シ而シテ若シ王ノ認可ヲ經スシテ婚姻ヲ行フ者アラハ此
 等ノ婚姻ハ悉ク無効タル可シト然レモ別ニ一條ヲ立テ
 曰ク王族中二十五歳以上三達ニ及ル者ニ於テハ十二月
 以前ニ其旨ヲ樞密院ニ通知シ其間ニ於テ上下兩院カ之ヲ
 非トスルノ意ヲ示サ、ルニ於テハ王ノ認可ヲ經テテ其
 婚姻ヲ行フヲ得ヘシト蓋シ此一條ハ初メ王カ書ヲ上下兩
 院ニ送リシ時ニハ未タ其計畫ナカシテ若ト見ヘ後世ニ
 傳フル所ニ據レハフツクス氏カ此議案ニ抵抗セシカ爲メ
 ニ其職ヲ辭シタルト又王ノ助言者中ニ於テ此議案ヲ非ト
 セシ者アリシトノ故ヲ以テ遂ニ右ノ一條ヲ加テテ條例ニ

制限ヲ緩和スル迄至リシヤ云々又此議案ハ漸シテ
 白ク斯ク禁止スル所ノ婚姻ヲ行フニ於テ其儀式ヲ與テ若
 クハ之ヲ助成若クハ其席ヲ臨メル者其何人ヲ決シ問ハ
 以凡テ不臣ノ罰ニ處ス可シト云々又王ノ
 此議案ハ王ノ自カラ計畫セシ所ニ似テ諸宰相ハ唯止ムコト
 得ス然レテ之ニ至致使會者遂ニ疑ニ可決ラザルナリ王カ
 其特權ヲ事ニ關シテ自カラ持スル所ノ意見ヲ發動シテ遂
 至王ヲ退テ少ナクモ自家ノ王族ニ對シテハ最上ノ權ヲ有
 セサル可決ラズ決心地ニ至リテ遂ニ王カ
 今可年ハ王族ニ對シテ自カラ決断ル所ノ無限ノ權力ハ實
 ニ盡ク可決諸ナルト云々又王カ決断ル所ノ無限ノ權力ハ實
 權ヲ求ムル及權ヲ保シテ否ヤヲ論議シ蓋シ王カ今求ムル所

同様に宏大ナル特權を曾テ公認セラレシコトヲ平ト云
 フテ一千七百十八年ニ於テ國王カ唯其孫ニ對シテ權効
 有タル者ヲ認ルコト所謂判事ノ篇高説ナリ者ニ據リテ既ニ認
 ヲラレシ所ナリ然レモ其認メラレタル特權ハ唯此一事ニ
 止リテ他ニ及ハサルナリ且當時判事ノ主張セシ所ノ意
 見ハ一讀スルニ其説ノ根據トスル所甚ク薄弱ニシテ法
 律ト先例トヲ牽強附會シ其説ハ便益主義ニ根據シテ立
 タル者ニシテ過度ニ其便益主義ヲ強張シテ則チ國王カ王
 ヲ得サルナリ又政略上ノ点ヨリ之ヲ觀察セシニ國王カ王
 族ヲ爲メニ其婚姻ノ事ヲ商議スル權効有シ此事ハ關シ
 テ國王カ有タル所ノ權効ハ唯父母トシテ有タル所ノ權効
 ニ過ク河キコトモ亦記ムヲ得ザルハ必要ナリ然レモ

王ノ特權有無
 ノ疑問ヲ判事
 ニ回付スルコト

モ命ヤ王ノ求ムル所ニ其齡如何ニ拘ハラス凡テ王ノ諸
 弟ト其叔父及ビ從兄弟ニモ及フモノナリ故ニ此ト如ク宏
 大ナル要求ニ直チニ之ヲ許容スル能ハザル所ニシテ先ツ
 左ノ疑問ヲ判事ニ付シテ其説ヲ求メ然リ曰ク王ハ法律上
 於テ前王ニシテ二世ノ子孫ト自家ノ諸子ハ其未下
 年ノ間此限ニヌラスノ婚姻ニ周旋シ且之ヲ認可スルノ權
 利ヲ有スルヤ否也而シテ此疑問ハ内國ニ住スルト否ト
 ナ問ハス凡テ前王ニシテ二世ノ諸子孫ヲ合ム者ナルカ故ニ
 九人ノ判事ハ皆王ハ此ノ如キ權利ヲ有スル者ニヌラス
 ノ答ヲ爲セリ故ニ更ニ疑問ノ意義ヲ制限シテ再ヒ之ヲ判
 事ニ付カズリシニ判事ハ答テ曰ク國王ノ諸子及ビ諸孫ト
 假定ノ王位繼續者外國ノ人ニ嫁セル諸王女ノ産セル所ノ

諸子ハ此例言アラズトハ對シテハ國王ニ其婚姻ヲ周旋シ
 且之ヲ認可スルノ權有テハ雖モ其他諸王族中如何ナ
 ル區域ニマデ此ノ如キ權限及テテ可シテ若シテ乎ハ余輩
 其事實確定後死者決ルハ發見アル旨能ハテ下蓋シ議案
 ニ明言スル所ノ特權ハ判事ノ許諾モシテ所ノ特權ニアリ
 明ナラ然ルハ大法官及ヒテ汝等國ノ公ニ如キハ判事ニ説
 子願同大説ヲ爲シテ曰以余輩ノ議案中ノ各條各款各語各
 綴音各文字悉ク之ヲ贊成可シ而シテ如何大流修正ヲ加テ
 シト然レモ之ニ一致セザレ可シ此説ヤ實ニ王ルル公
 大法官ニ相應シタル粗暴ノ言ト云テ可シ公認又確言説テ
 曰ク此特權ハ其國家ニ緊要ナルコトニ根據アル者ナリ下此
 ノ如キ説ヲ遂テ此議案ハ根據成セ國王カ求テ正所

正所
 大法官
 判事

婚姻條例案ノ
 主義ノ擅恣ナ
 ルコト

其他如何テ其權力ニ之ヲ適用シテ主張スルヲ得サル者
 其ヲホルナリハ是レ其ノ權限ニテ其ノ權限ニテ其ノ權限
 此議案ノ擅恣ノ性質ヲ有テル事ニ甚ク著明トテ其ノ抑
 王族ノ婚姻ニ關シテ幾分ヲ制限主護シテ其ノ敢テ不遵テ
 其ノ可シ例ニ對シテ王族ハ王ヲ認可シテ其ノ臣民若クハ雖
 馬魯教黨ノ人又ハ我國ト戰爭ヲ行フ所ノ外國王家ノ人ト
 婚姻スルヲ得テテ云々如キ制限ヲ立ツルハ則チ可ナカル
 然レモ王ニ身ヲ擅斷シ從フテ外人ニ其別ニ規則ヲ設
 ケテ下云々至テ是レ立法上ノ正確ナル原理ヲ悉ク破
 壞ナル者ナリト云ハ其ノ可カラズ又王族ノ諸子及ヒ諸女
 ハ二十五歳マデテ未丁年ノ期トテ其ハ是レ獨リ婚姻ノ事
 ナ一般法律ノ例外ニ置ク者ニシテ甚ク嚴チリト云フ可シ

又國王ハ王族ノ三十六歳ニ達スルマデハ其婚姻ヲ禁スル
 又得ルノ事ナラズ若シ永久之ヲ禁セシムル欲セバ唯國王ニ
 從屬スル所ノ議院ノ發言ヲ得ヤ則テ是レハ不モ而シテ此
 人如キ大規則ニ何ニ據ルカ云々又三人法若クハ天法ノ如
 般ノ原理ニ基ク者マシテ之ヲ唯一人ノ強力者ハ擅斷ス
 以テ之ヲ定ムル者ニ外テハ皆無クシテ其間ハ百十ニ
 然レバ國王ノ一身ノ意志ハ餘ヲ抵抗モ數々抵抗モ共ニ之ヲ
 挫折シテ遂ニ勝ヲ制スルヲ得ヤ而シテ王ハ此議案ニ抵抗
 シテ者亦寬恕スルヲ能ハサシテ上院ニ於テ此議案ニ對
 テ三種ノ異議ヲ立ル者アリテ甲ニ其十四人ノ議員之署名
 名シ乙ニ其七人ノ議員之署名セリ此等ノ異議ノ理由書
 中ニ於テ悉ク此議案ニ對スル駁議ノ要点悉簡明ニ記シテ

主權ノ能ハズ
 議院ノ同意ヲ

此等ノ反對アリシニ雖モ尙テ此議案ハ速ニ上院以通過セ
 リ下院ニ於テハ此議案ニ反對スルノ説ハ更ニ強固ニシテ
 且久シキヲ保ツ得テ下院ハ上院ノ記録簿ニ就テ判事
 以テ之ヲ搜索シ而シテ此議案ヲ痛撃スル所ノ議論ハ學識共
 ニ具アリタル討論ナリキ然レモ遂ニ有力ナル手（按有手ナリ）
 手トハ王ヲ指シテ爲メ此議案ヲ通過セラレシニ至リ此
 討論ハ際下院ノ門戸ヲ閉鎖シテ一切傍聽人ヲ入禁シ禁
 貴族ハ下院ヲ傍聽席ニ入ルヲ得ルヲ求メテ雖モ許
 サレサリキ加之政府ハ此議案ヲ印刷スルヲ拒ミ且此事
 ニ於テ非常ノ多數ノ賛成ヲ得タリ而シテ議長以發議ニ因
 リ王カ婚姻ヲ認可スル所ノ証狀ニハ國璽ヲ鈐ス可シトノ
 虚飾ヲ修正ヲ加ヘタルノ間且止リ其他亦毫モ修正ヲ加フ

ウニールス太子ノ秘密ノ結婚

ルヲ得スシテ三月二十四日遂ニ此議案ハ可決セラレタ
 リ後ニ至リ此條例ヲ廢セントシ又ハ之ヲ避ケントシタル
 事アリト雖モ其功ヲ奏スルコト能ハスシテ此條例ハ嚴ニ維
 持セラレタリト云フ
 一千七百八十五年ウニールス太子（按）四世ヲ指スハ羅馬舊教ヲ
 奉スル所フス（按）ト云ヘル女ハ秘密ニ結婚セリ
 然レモ此結婚ハ王ノ認可ヲ經スシテ之ヲ行ヒタル者ナシ
 テ無効ノ者ト定ツシカハ太子ノ放逸古ク此美女ヲ信
 仰自由ヲ得ルシメ兼テ又自家感情慾ヲモ恣ニシテ若
 シ太子ニシテ羅馬舊教ヲ奉ズルニ入ト有効ニ結婚ヲ行
 タラズニハ爲メ法律上王位繼承ノ權ヲ失ハ悉州ヲ得ス
 也雖モ斯クモ如ク其結婚ハ無効ノ者ト定ツシモ以テ太子

サセツキス公ノ婚姻

ハ結婚ニ附殖スル所ノ義務ヲ免レ其王位繼承ノ權ヲ失ハ
 サルヲ得ズル太子ノ此結婚ハ固ヨリ法律上無効ノ者ナリ
 ト雖モ或ハ之カ爲メニ權利ノ條例ノ罰則ニ關シテ困難ナ
 ル疑問ト議論トヲ生スルニ至ルナキヲ保ス可カラザリキ
 而シテ若シ此結婚ノ事ヲ明言シタランコトハ太子ハ必ス世
 ノ誹謗ト侮慢トヲ受サルヲ得ザリシヤ疑フ可カラサルナ
 リ故ニ太子ハ此結婚ノ事實ナント云ヒテ之ヲ拒ミ其最親
 ノ朋友ヲ機關トシテ已レテ欺キ世ヲ瞞ラカシメ（按）最親
 トハ太子ノ妃ヲランスウツキノカトリヨ云フ太子ハ
 陽ニカトリヨノ夫娶リ陰ニフキツヘルトヲ愛シ世ハ
 ニハカトリヨノ私ト婚シタル事ヲ示シ以テフキツ
 ヘルナルトト私ト婚シタルヲ指スナリ
 サセツキス公ハ王ノ認可ヲ經ズシテ婚姻ヲ行フト二回
 及ヘリ初メ一千七百九十三年ニ於テ貴女アウガスタマル

レトト結婚シ其後又貴女セシリアアウーウィットト結婚
 セリ公ノ最初ノ婚姻ハ外國ニ於テ其儀式ヲ行ヒシ者トレ
 ハ其結婚ハ王族婚姻條例ニ照ラシテ無効トス可キ者
 ナルヤ否ヤノ疑問起レタリ然レモ後改テ英國ニ於テ其儀式
 ヲ行ヒタリ蓋シ英國ニ於テ此結婚ハ無論ニ無効トス可
 タラサルヲ得共ニテ其後改テ英國ニ於テ其儀式
 王ハ直チニ國王附屬ノ訟師ヲシテ此婚姻ヲ無効トラシム
 ルノ詞訟ヲ開カシメタルニアルチスノ裁判所ニ之ニ對シ
 テ全ク無効ナリトシ判決ヲ下シタリ
 一千八百三十一年ニ於テ政府ハ此婚姻ハ有効ナルトモ否ヤ
 ニ關シテ法官ニ説ヲ求メタリ以テ法官ハ其後改テ此裁判
 所ノ判決ニ至當ナルトシ証セリ一千八百四十三年ニ於テ

公ノ薨スルニ及ヒ公カ此婚姻ニ因テ設ケシ所ノ公ノ子ア
 ウガスタスズスルハ其父ノ領地及名爵ヲ繼承カシテ其要求
 シタリ抑々此婚姻ノ式ハ初メ一千七百九十三年ニ羅馬ニ
 於テ英國教會ノ規則ニ從ヒ同教會ノ一僧カ之ヲ舉行セル
 者ナリ故ニ此結婚ハ英國大臣民ノ間ニ於テ固ヨリ有効ノ
 契約ナルトシ雖王族ニ在テハ王族婚姻條例アレカ爲メ
 ニ之ヲ有効トスルヲ得ズ而シテ上院ニ於テ之ヲ審判スル
 際王族婚姻條例ノ制限ハ英領以外ニ及ブ者ニテラサル
 ヲ主張スル者アリ然レモ諸判事ハ皆同土ノ説ヲ立テ
 曰ク此王族婚姻條例ノ制限ハ人身上ニ關スルノ制限ナレ
 ハ英國外及ヒ英國管轄外ト雖モ此等ノ制限ハ此條例ヲ遵
 奉ス可キ人々ノ行ク所ニ付隨シテ離ル可カラズト而シテ

一千八百四年
王カ其孫女シ
ヤーロットノ
教育ヲ管理ス
ルノ權アルコ
ト確定スルコ

上院ハ此説ヲ採リ右要求者ハ其權利ヲ證スル能ハストノ
判決ヲ下セリ
國王カ其孫ノ教育ヲ管理スルノ特權アルコトハ一千七百十
八年ニ於テ既ニ公認セラレシ所ニ於テ一千八百四年ニ於
テ此事再ニ確定セラレハ至レリ蓋シ王カ其孫女シヤ
ロットヲ後見スル權ヲ求メタリシニシヤーロットノ父ウ
イルズ太子ハ其助言者ノ互ニ説ヲ異ニスルニ迷ヒ此權ヲ
王ニ讓ルヘキカ將タ王ト此權ヲ爭フヘキカト關シテ久シ
ク遲疑シテ決セザリキ然レモ終ニ太子ハシヤーロットノ
教育ヲ管理スルノ權ヲ王ニ托セシコト諸シタル者ノ如シ
ト雖モ其約條ノ語意甚ク明瞭ナラザル者アリシヲ以テ之
ニ關シテ誤解ヲ來スニ至レリ而シテ又太子ハ自家ノ一

且爲シタル約條ヲ廢棄シタリト云ヘリ然レモ終ニピット
氏ハシヤーロットヲウインツールノ宮殿ニ引取リ以テ此議
論ノ局ヲ結ヘリ然レドモ太子ヲシテシヤーロットノ教育
ノ事ニ與ルノ權ヲ全ク失ハシメサリキ

明治十五年九月三十日版權免許
明治十六年五月三十日出版
同 年 十一月十九日再版御届
同 年 同 月三十日再版

定價金七十錢

明治十五年九月三十日版權免許
明治十六年五月三十日出版
同 年 十一月十九日再版御届
同 年 同 月三十日再版

譯兼出版人

神奈川縣平民

島田三郎

東京麴町區中六番町卅一番地

兵庫縣士族

乘竹孝太郎

東京牛込區牛込北町卅四番地

經濟雜誌社

東京々橋區彌左衛門町七番地

秀英舍

東京々橋區西紺屋町廿七番地

同發行
發兌
印行

大坂心齋橋通北久太郎町

柳原喜兵衛

賣

全 南壹丁目

松村九兵衛

全 唐物町四丁目

森本太助

全 備後町四丁目

梅原龜七

捌

尾州名古屋本町八丁目

片野東四郎

東京日本橋區通一丁目

北畠茂兵衛

全 全通二丁目

稻田佐兵衛

全 全通二丁目

小林新兵衛

書

全 全通三丁目

丸屋善七

全 全南傳馬町一丁目

叢書閣

全 淺草區茅町二丁目

北澤伊八

肆

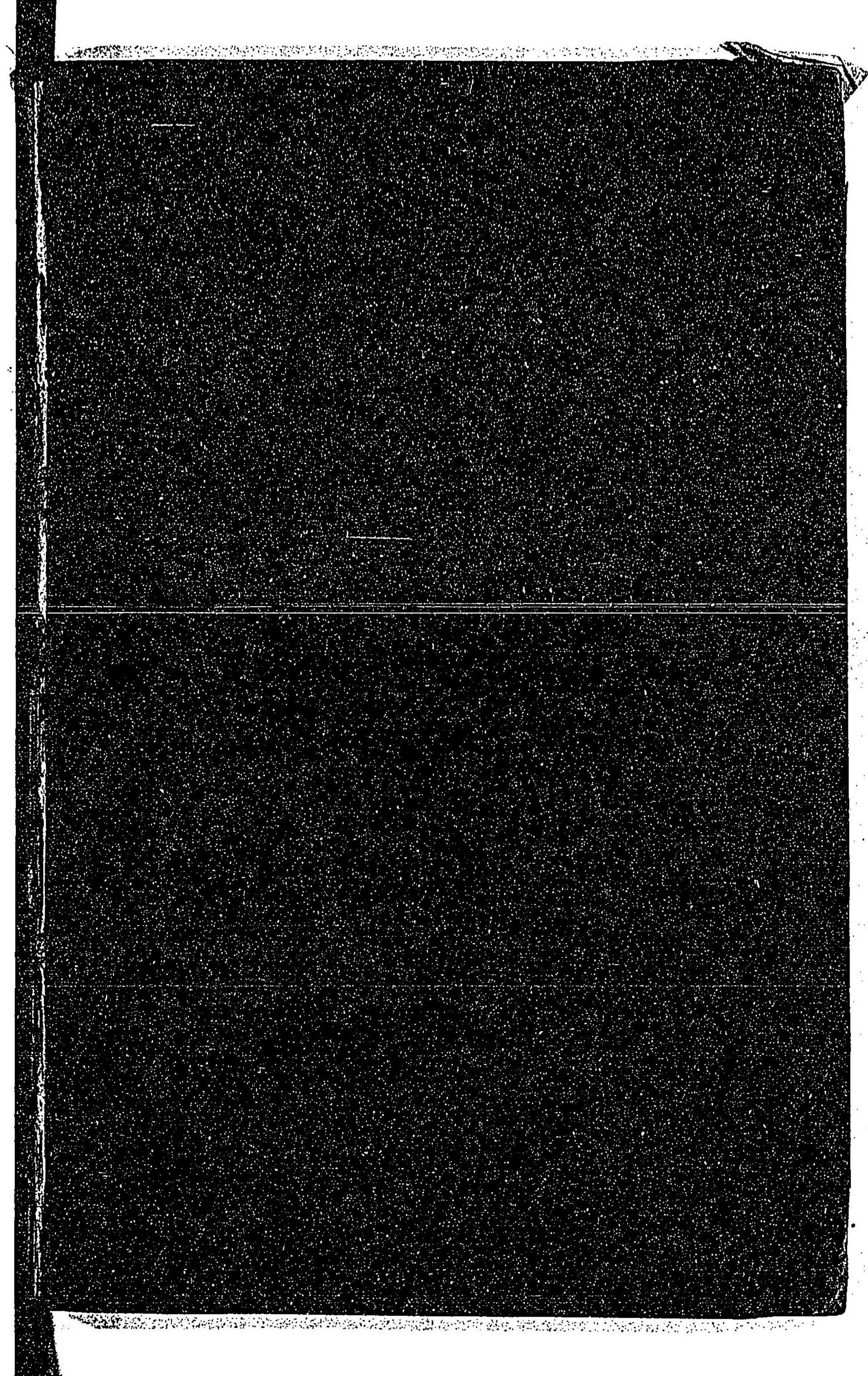
全 芝區三嶋町

山中市兵衛

全 全太神宮前

牧野吉兵衛

27
1



27

朗香